

昭和57年度

# 埋蔵文化財緊急発掘調査概報

吉志部2・3号墳

吹田29号須恵器窯跡

垂水南遺跡

1983年3月

吹田市教育委員会

## 序

市教育委員会は、昭和57年度の国庫補助事業として、文化庁及び大阪府教育委員会のご指導をいただきながら、吉志部2・3号墳推定地、吹田29号須恵器窯跡、垂水南遺跡の3遺跡に対する調査を実施しました。

このなかで、吉志部2・3号墳は、史跡吉志部瓦窯跡の所在する史跡公園の隣接地にあり、從来より特に注意の払われていた地域であるにもかかわらず、ごく最近に至るまで、古墳の存在が明らかにされていなかったものです。しかも埴輪を有する古墳として、本市でも稀有な例であり、立地条件の悪さから、主体部等の遺存状況の確認調査を早急に実施する必要が指摘され、本年度の調査となりました。

その反面、29号須恵器窯跡は、すでに昭和37年に発見され、昭和41年には窯体が破壊されるに至り、高校生を主体とした若いエネルギーによって発掘調査がなされ、破壊寸前のところを記録保存されたものです。この調査は、本地域における文化財保存活動として、なかでも、小規模開発に対して積極的に発掘調査をとりくんだものとしての出発点ともなりました。その後、灰原のみが残存していたのですが、開発の波には勝てず、隣接地にまで住宅建設がおしよせる中で、遺物の散逸が激しくなり、何らかの対応を迫られていたものです。

この両遺跡の調査に至るまでの経過をみると、本市のように都市化の進んだ地域といえども、遺跡の新規発見は、何時何處でなされるか予断を許さない状況であるとともに、すでに発見され、周知されている遺跡といえども、周辺の環境変化によって、埋蔵状況が刻々と変化し憂慮すべき事態となることを示しております。すなわち、文化財保護、なかでも埋蔵文化財は常に油断のならない状況であることをはっきりと物語っているといえます。今後とも市としては、施策の充実をはかることはもとよりのことありますが、市民各位におかれましても常に充分なご協力を賜りますようお願いする次第です。

昭和58年3月

吹田市教育委員会

教育長 井 上 孟 司

## 例　　言

1. 本書は、昭和57年度国庫補助事業として行った垂水南遺跡等、3遺跡の発掘調査の概要をまとめたものである。

2. 本書においては、次の3次にわたる発掘調査の成果を収録した。

第1次 吉志部2・3号墳推定地

吹田市岸部北4丁目1042ほか

57.5.20～6.19

第2次 吹田29号須恵器窯跡

吹田市岸部北4丁目1064-1ほか

57.9.24～11.13

第3次 垂水南遺跡

吹田市垂水町3丁目28-1

58.3.25～3.29

3. 資料の整理は、市教育委員会社会教育課文化財分室において実施した。

4. 本文は藤原学・増田真木・西本安秀が分担して執筆し、鍋島敏也がこれを補助した。

各章の執筆分担は次のとおりである。

I・IV・V 藤原 学

II・V 西本 安秀

III・V 増田 真木

なお、第Ⅱ章 第3節b. (石器)については、関西大学大学院生 山口卓也氏に作図・執筆を依頼した。

5. 資料整理については、外業調査参加者以外に、山下 薫・山田貴賀子・清水 篤・酒井泰子が分担した。

6. 本分中の遺物実測図中、土器は一部を除いては1:4に統一したが、石器等については縮尺を統一していない。遺物番号は、本文・挿図・図版ともにすべて統一した。

### 発　　掘　　調　　査　　参　　加　　者　　一　　覧

調査主体 吹田市教育委員会 教育長 井上孟司

調査指導 関西大学教授 綱千善教

調査担当 社会教育課 藤原 学・増田真木

調査員 西本安秀 (1・2次)

関西大学大学院生 米田文孝 (1次)

〃 服部聰志 (1次)

調査 佛教大学学生 田中充徳 (1・2次)

補助員 大阪経済大学学生 森沢直樹 (1・2・3次)

神戸学院大学学生 高川義明 (1次)

関西大学学生 鍋方正樹 (1次)

## 目 次

第1章 昭和57年度埋蔵文化財緊急発掘調査の経過	1
第2章 吉志部2・3号墳発掘調査	4
第3章 吹田29号須恵器窯跡発掘調査	14
第4章 垂水南遺跡発掘調査	29
第5章 昭和57年度緊急発掘調査の成果をうけて	33

---

## 図 版 目 次

図版1 吉志部2・3号墳 景観	
図版2 吉志部2・3号墳 近景	
図版3 吉志部2・3号墳 遺物出土地点	
図版4 吉志部2・3号墳 尾根上試掘トレンチ	
図版5 吉志部2・3号墳 試掘トレンチT-8・T-9	
図版6 吉志部2・3号墳 採集遺物	
図版7 吹田29号須恵器窯跡 景観・近景	
図版8 吹田29号須恵器窯跡 試掘トレンチ	
図版9 吹田29号須恵器窯跡 G1	
図版10 吹田29号須恵器窯跡 G1・G2	
図版11 吹田29号須恵器窯跡 出土遺物	
図版12 垂水南遺跡 近景・試掘トレンチ	

---

## 挿 図 目 次

第1図 発掘調査地点	1
第2図 吉志部2・3号墳周辺図(1:5000)	4
第3図 現地説明会風景	5
第4図 吉志部2・3号墳地形実測図	6
第5図 吉志部2・3号墳トレンチ土層断面図	8

第6図 吉志部2・3号墳採集石器実測図	10
第7図 吉志部2・3号墳採集遺物実測図	11
第8図 採集埴輪実測図（1：2）	12
第9図 採集須恵器壺口縁部写真	13
第10図 吹田29号須恵器窯跡窯体実測図（昭和41年調査時）	15
第11図 吹田29号須恵器窯跡周辺図（1：5000）	16
第12図 吹田29号須恵器窯跡地形実測図	18
第13図 吹田29号須恵器窯跡トレンチ土層断面図	19
第14図 吹田29号須恵器窯跡灰原土層断面図	20
第15図 黒色灰層出土遺物実測図	21
第16図 淡灰色砂質土・淡褐色砂質土層出土遺物実測図	23
第17図 赤色焼土層出土遺物実測図	24
第18図 その他の出土遺物実測図	25
第19図 球柱形土製品実測図（1：2）	26
第20図 手捏ね土器実測図（1：2）	26
第21図 ヘラ記号拓影（1：2）	28
第22図 重水南遺跡周辺図（1：5000）	29
第23図 重水南遺跡トレンチ配置図	30
第24図 重水南遺跡土層断面図	31

---

### 付 表 目 次

表1 昭和57年度重水南遺跡調査一覧	3
表2 手捏ね土器観察表（赤色焼土層出土）	27
表3 土層序一覧	30

## 第1章 昭和57年度埋蔵文化財緊急発掘調査の経過

吹田市教育委員会では昭和41年に南次田第2土地区画整理事業の進展に伴って発見された垂水南遺跡に対して、昭和51年度より国庫補助事業として緊急調査事業を開始した。以後、昭和57年度までの7年間にわたる発掘調査の実施により、遺跡範囲や遺物包蔵状況の確認に多くの成果があったが、昭和55年度より市内各所における開発行為に広く対応するため、垂水南遺跡に限らず、他の緊急を要する遺跡に対しても、事業の対象を拡大した。

本年度の第1次調査は吉志部2・3号墳推定地に対して実施され、昭和57年5月20日より6月19日まで吹田市岸部北4丁目1064-1ほかで実施された。

吉志部2・3号墳推定地は、千里丘陵東部の紫金山と呼ばれる小丘陵に位置し、同一丘陵内には国指定史跡となっている吉志部瓦窯跡群(平安初期)がある。本墳は昭和56年夏、地元在住の学生、高川義明氏によって遺物が採集され、教育委員会に届けられたことにより、古墳の所



第1図 発掘調査地点

1. 第1次 吉志部2・3号墳
2. 第2次 吹田29号須恵器窯跡
3. 第3次 垂水南遺跡

在が初めて意識されるようになった、近時発見の遺跡である。遺物発見地点は2箇所あり、すでに後世に両斜面を削りとられた丘陵の突端部及び斜面で、2地点は約40m隔っており、2基の古墳が存在したことが推定できる。

遺物発見地点の南方約80mには昭和47年6月に吹田市史編さん室と関西大学考古学研究室によって発掘調査された、7世紀初頭の横穴式石室を内部主体とする吉志部古墳があり、これを1号墳と改称し、今回確認した古墳推定地を各々、吉志部2号墳、吉志部3号墳と呼称した。

遺物収集地点は丘陵の突端や急斜面で、流土が激しく、豪雨等によって常に現状が損壊する危険をはらんでおり、古墳の遺存状態が全く不明なまま放置しておくことは、文化財保護上好ましい状況ではなく、早急に主体部や外部施設等を確認する必要が生じた。

加えて、採集された遺物中、古墳時代の須恵器は古式に属するものであり、さきに調査された吉志部古墳とは実年代で約1世紀の時期的隔たりをもつものであり、当地の後期古墳群形成の初期に位置するものであることは確実である。かかる観点から、現地形を記録にとどめるための地形測量及び主体部の遺存状況確認のための尾根部分に対する試掘調査を実施したものである。調査は遺物採集地点を中心にして1,329m<sup>2</sup>の測量を実施するとともに尾根部分に計10ヶ所のトレンチを設定し、主体部等の確認調査を実施した。ただ、2号墳南側斜面の須恵器出土地点付近に関しては、斜面が急峻なため、調査後の流土防止策が困難であったため、調査を保留せざるを得なかった。なお、6月6日、関係者及び付近住民を対象に発掘調査の成果を現地において公開した。

第2次調査は、吹田29号須恵器窯跡（以下29号須恵器窯跡とする）に対して実施され、昭和57年9月24日より11月13日まで、吹田市岸部北4丁目1064-1ほかで実施された。

29号須恵器窯跡は昭和37年に鍋島敏也氏の分布調査によって所在が明らかとなったが、昭和41年秋に開始された土取り工事によって窯体の下端が切断されるに至り、府立茨木高校歴史研究部により発掘調査が実施され、破壊寸前に窯体部分については記録に止めることができた。調査終了後、窯体は完全に破壊されたが、灰原は下方の竹藪部分に残存していた。当時、土地所有者が窯体部とは異なり、また、早急に破壊される恐れがなかったため、この部分の発掘調査は実施されなかった。

しかし、昭和50年代の後半頃より周辺で急速に木造住宅を主体とする住宅建設が相次ぎ、さらに本年に至って灰原の遺存する竹藪の隣接地に住宅が建設されはじめた。また、残された斜面に須恵器が散乱しており、これら周辺の宅地化によって資料が散逸されだしたらしく、市民の通報などによって、遺物の出土が報告される事態となつた。

このような情勢から、現状のまま放置すれば未調査のまま資料が散逸してしまうことが憂慮される事態となつたために、土地所有者 木村正太郎氏のご承諾のもとに発掘調査を実施し、記録に止めることとした。

発掘調査は、周辺の地形測量を実施した後、露出している遺物散布範囲を参考に、斜面に試掘トレンチを設定した。試掘の結果、旧地形を比較的保っていると考えられていた竹藪部分に

は濃厚な灰原が存在せず、その西北方の既に地表に流れ出ている灰層下に不動堆積とみられる黒色灰層が存在することが判明し、以後、この部分を中心に灰原の平面調査を実施した。調査の結果は多数の須恵器を検出したほか、土師質の手づくね土器を検出するなど、予想外の成果がみられた。

なお、9月24日、関係者及び付近住民を対象に、発掘調査の成果を現地公開した。

第3次調査は垂水南遺跡に対して、昭和58年3月25日から3月29日まで、吹田市垂水町3丁目28-1ほかで実施した。

垂水南遺跡の所在する垂水町3丁目一帯は区画整理による都市計画街路の完備にともなって、ビル・マンション・倉庫・個人住宅等の建設工事が急増し、それに伴って昭和51年度より国庫補助事業として緊急調査を開始したが、国庫補助事業以外でも、大規模開発に伴って原因者負担による発掘調査が進められ、昭和57年度末までに合計26次にわたる発掘調査を実施し、多くの成果をあげてきた。

しかし、従来の調査においても、遺跡の範囲等も十分に把握されてはおらず、それに対しても垂水地区の開発の進展も衰えを見せせず、遺跡保護の観点より緊急性を有する遺跡であり、事業の継続が必要である。

昭和57年度は、昭和58年2月に至って垂水南遺跡範囲内にあたる垂水町3丁目28-1において個人住宅建設の予定がもちあがり、市教育委員会と協議をつづけた結果、建物の基礎部分が遺構面に達しないことが判明したため、部分的な試掘調査を実施することとなった。発掘調査は南北に試掘トレンチを設定し、層位発掘を実施した。調査の結果、平安初期において洪水の所産とみられる厚い砂層があり、この層位において、一時的にも溝をなしていたとみられる痕跡が検出された。しかし、本遺跡の主要部を占める古墳時代については、微量の遺物包含を認めると、明確な遺構は存在せず、本遺跡の主要部には該当しないことが判明したため、試掘トレンチの拡大を行わず、調査を終了した。

さて、昭和57年度垂水南遺跡の発掘調査については、今回報告分を含めて4件の発掘・試掘調査があった。第26次調査以外については、資料整理が未完であり、後に報告する。

表1 昭和57年度垂水南遺跡調査一覧

次 数	略 号	調 査 場	調査時期	所 見	備 考
第23次	TMET	垂水町3丁目3-7 ほか	57. 4	土師器細片若干出土	試掘のみ
第24次	TMIS-I	垂水町3丁目28-1	57.11	古墳時代土師器、土器群 平安時代小溝	
第25次	TMKS	垂水町3丁目22-7	58. 1	古墳時代土師器、手縫	試掘のみ
第26次	TMIS-II	垂水町3丁目28-1	58. 3	古墳時代土師器若干 木 製 品	今回報告分

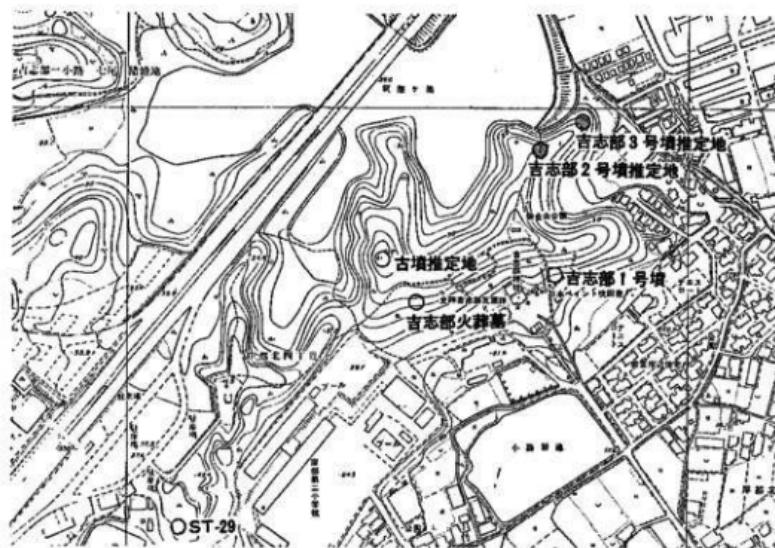
## 第2章 吉志部2・3号墳発掘調査

### 1. 位置と環境

吉志部2・3号墳は吹田市岸部北4丁目1043番地ほかに位置する。当地は大阪平野の北部に突出した千里丘陵の東南端部にあたり、淀川の沖積平野に向かって東に開析する谷、丘陵が連なっている。その一丘陵で、通称「紫金山」と呼ばれる丘陵塊の東部に東へ舌状に細長く伸びた尾根上に吉志部2・3号墳は立地する。標高は約32m～約24mである。

この地では古くから土砂取りが行われているらしく、特に垂直な崖となっている北側～東側の大規模な土砂取りは、北接する釈迦ヶ池の築堤のための用土取りの結果と考えられる。南側斜面も当地の自治会運動広場造成の際に、斜面の整形が行われたため、この尾根は南側斜面の一部を除いて、ほとんど旧状を残していないと考えられる。

2号墳推定地は東へ伸びる尾根と、北へ伸びる尾根との分岐点で、わずかな高まりが認められる所であり、標高約32mに位置する。3号墳推定地は2号墳推定地から東へ伸びる尾根の最先端部の平坦面上であり、標高約24mである。



第2図 吉志部2・3号墳周辺図(1:5000)

この紫金山周辺では旧石器～歴史時代に及ぶ遺跡が数多く存在している。紫金山の丘陵の西端、大阪府立吹田高校の北側に存在する吉志部遺跡は早くから旧石器～縄文時代の石器が多量に採集されて、周知の遺跡とされてきた。昭和55年、56年度の調査では旧石器時代遺物の包含層の確認と、旧石器～縄文時代の遺物を検出するという成果を挙げることができた。なお吉志部遺跡では弥生時代の石器、土器も若干検出されており、周辺で弥生時代遺跡の存在を想定することができる。

古墳時代になると、吹田市域東半では多くの須恵器窯が構築される。当地周辺はその密集地帯であるが、それに対して、古墳は極めて少なく、確実なものとして昭和47年に調査された吉志部古墳（1号墳）のみである。吉志部古墳は、紫金山の南側に鎮座する吉志部神社の本殿から東へ約30mの地点に存在する。墳丘規模は不明であるが、無袖式の横穴式石室を内部主体とした後期古墳で、出土した遺物から7世紀初め頃に構築されたと考えられる。

古墳推定地では吉志部古墳から西へ約150mの地点に標高約41mの丘陵頂部でわずかに高くなつた所があり、古墳の可能性が考えられる。その他では、紫金山の丘陵から谷をはさんで北側の向かいの丘陵に陶棺片を出土した地点が2カ所（山田下北方、山田下南方）あり、古墳墓の存在を想定できるが、詳細は不明である。

歴史時代になると、本丘陵の東方約200mの地点にある七尾瓦窯跡、そして本丘陵の吉志部瓦窯跡が造宮瓦窯として成立した。七尾瓦窯では後期難波宮所用瓦、吉志部瓦窯では平安宮所用瓦を主として焼成している。歴史時代の墓は顕著ではないが、吉志部神社の本殿西方約100mの南斜面に吉志部火葬墓があり、墓骨壺の中に火葬骨が納められているのが検出された。時期は奈良時代末期～平安時代初頭に比定されている。

このように連綿と各時代の遺跡の続くことは、飽えず生活の場、生産の場、墓地として活用され続けていたことを意味し、当地はきわめて注目すべき地域であるといえる。

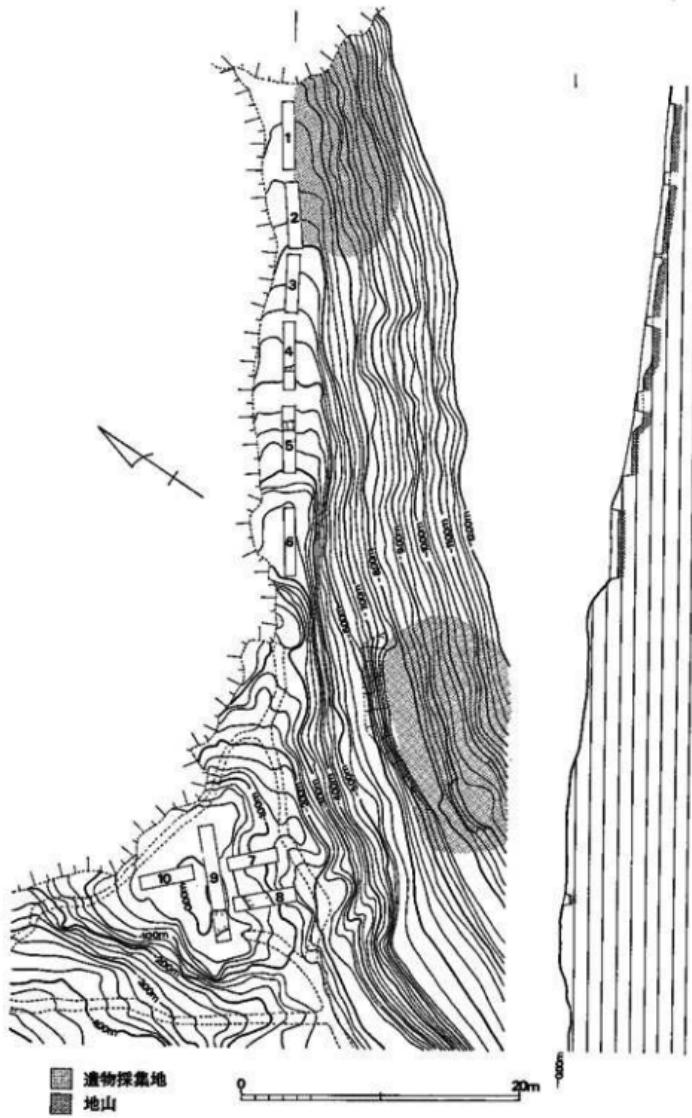
## 2. 調査の経過

発掘調査は、古墳の主体部の確認を目的として、遺物の採集された2地点、すなわち、尾根分歧点（吉志部2号墳推定地）、尾根先端（吉志部3号墳推定地）を中心に、昭和57年5月20日から6月19日まで実施された。まず、丘陵の現地形を把握し、効率よく調査を進めていくために、地形の測量を行った。

2号墳推定地は、尾根が三方へ展開する分歧点にあり、古墳立地として最適な地点であるが、若干の高まりをなしていることが認められるものの、頂部は平坦であり、かなり削



第3図 現地説明会風景



第4図 吉志部2・3号墳地形実測図

平を受けていることがわかった。遺物出土地点は、この地点より7.5m以上も下った斜面中腹であり、かかる状況から、出土遺物は、古墳の損壊後の流土が再堆積した中に包含されていたものとすることが考えられる。しかし、出土資料が量的にややまとまりをみせるところから、墳丘外の墓前祭祀跡などの可能性も保留されなければならない。

3号墳推定地は、大きく侵食を受けた尾根突端である。遺物出土地点は尾根頂部の平坦面から斜面全般に及ぶが、量的にもまとまりに欠け、散在するところから、流失したものと考えられる。ただ、平坦面から斜面に移行する変換点に埴輪基底部が遺存していたと伝えられるところがある。位置的にみて、古墳裾を囲繞する埴輪列の一部と考えられるが、尾根頂部自体が完全に削平を受けている現状では検証は不可能であった。

以上の測量調査の成果を踏まえ、3号墳推定地付近の尾根平坦部上にトレンチを北東から6カ所設定し、順次T-1～T-6とした。2号墳推定地では頂部平坦面に2カ所、さらに南の斜面に2カ所設定した。南の斜面に設定したトレンチを東からT-7～T-8とし、頂部平坦面に設定したトレンチを南からT-9～T-10とした。

トレンチ調査の結果、T-3、T-4において若干の小規模な落ち込みを検出したことと、T-4、T-5において地山整形によって段状をなす部分が存在すること、T-8・T-9において2基の落ち込みを検出したことが成果として挙げられるが、いずれも古墳関係の遺構とは考えられず、写真撮影、実測、さらに煙尻しをもって、6月19日すべての調査を終了した。なお、6月6日(日曜日)に市民約40名の参加を得て現地公開を行い、調査の状況を説明した。

### 3. 調査の成果

#### a. トレンチ調査の所見

各トレンチにおける基本的な層序は、尾根平坦面上と尾根分歧点上で二様に分けられる。遺物は、表土からは若干埴輪片、平瓦片、須恵器片等を検出したが、表土より下層では全く検出できなかった。

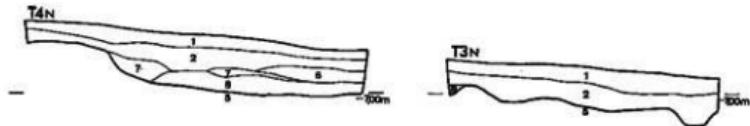
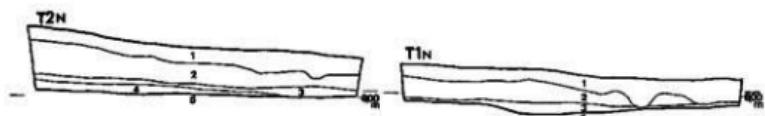
次に各トレンチの調査所見を概要する。

#### T-1、T-2

調査地域の北東端、尾根突端の平坦面上に設定したトレンチで、それぞれ長さ4.8m、幅0.8mである。表土下に2～3層の砂質土層が存在する。地山は黄白色砂層と考えられ、地山のレベルも西から東へ緩やかに傾斜している。

#### T-3

長さ3.8m、幅1mのトレンチである。層序はT-1とほぼ同様である。トレンチ西側地山面上に、直徑20～30cmのピット状の落ち込みを4カ所検出したが、遺物は全く出土せず、時期及び性格についても明らかにできなかった。



- |              |             |            |
|--------------|-------------|------------|
| 1. 表土        | 7. 黄灰色粘質土   | 13. 灰色粘質土  |
| 2. 黄褐色砂質土    | 8. 暗黄灰色砂質土  | 14. 赤褐色砂質土 |
| 3. 赤褐色土      | 9. 淡褐色砂質土   | 15. 灰色砂質土  |
| 4. 黄白色砂質土    | 10. 明暗褐色砂質土 | 16. 淡灰色砂質土 |
| 5. 地山(黄白色砂層) | 11. 噴灰褐色砂質土 | 17. 灰褐色粘質土 |
| 6. 黄褐色土      | 12. 淡灰色砂質土  | 18. 灰色粘砂質土 |



第5図 吉志部2・3号墳トレンチ土層断面図

#### T-4

長さ4.8m、幅0.8mのトレンチである。トレンチ東半部において直径20~30cmの6ヵ所のピット状落ち込みを地山面上で検出した。いずれも埋土は暗褐色砂質土である。T-3の落ち込みとの関連が考えられるが、地山面自体が軟弱な砂層であること、落ち込み自体の輪郭も明瞭なものでないことから、柱穴ではない。時期についても遺物が出土していないので明らかにできなかった。

また、トレンチの西側寄りの位置に、地山面を段状に削り出しているのを検出した。東へゆるやかに傾斜した地山面が、やや急に約30cmの高低差をもって落ち込んでいる。何らかの人為的な整形と考えられるが、その性格、時期等についても不明である。

#### T-5

長さ4.8m、幅0.8mのトレンチである。トレンチ内の東側寄りの位置で、地山面を整形して段状にしているのを検出した。西側の上段はほぼ水平であるが、東へ向かって高低差約70cmをもって急角度に落ち込み、再び下段はほぼ水平となっている。T-4の地山整形と同一の性格を有するものと考えられるが、その性格については不明である。遺物等は出土せず、時期についても明らかにできなかった。

#### T-6

長さ4.8m、幅0.8mのトレンチである。T-6の西方に接して若干の古墳状の高まりが認められたが、その北側は大きく侵食を受けており、崩壊の危険性があるため、トレンチを設定できなかった。そこで、その東側のT-6において遺構・遺物の検出をはかったが、何ら所見はみとめられなかった。

#### T-7

2号墳推定地からやや南に下った斜面に設定したトレンチで、長さ3.5m、幅1.0m。トレンチ東端の表土下約10cmで精良な灰白色粘土層に達する。灰白色粘土層は2号墳推定地の尾根頂部付近で普遍的にみられ、土層の堆積状況よりみて、この層が地山と考えられる。遺構・遺物は検出できなかった。

#### T-8

T-7の西隣りに設定したトレンチで、長さ4.2m、幅1.0mである。トレンチの北端、表土下約10cmで、地山である灰白色粘土層に達する。トレンチの南半部は、表土直下に地山層が存在し、南側斜面では堆積層の流出が激しいことを示している。トレンチ内の北側寄りの位置に、東西方向の落ち込みを検出した。地山面を掘り込んでおり、幅約1.8m、深さ約20cmで、埋土は上から白色粘土、灰白色砂層、明茶色砂層という層序である。遺物は全く検出できなかった。

#### T-9

2号墳推定地頂部に設定したトレンチで、長さ8.2m、幅1.0mである。表土下約5cmで地山に達する。トレンチの西端寄りの位置に、地山を掘り込んだ南北方向の落ち込みを検出した。

幅は北壁で2m、南壁で1.5mであり、深さは約40cmである。埋土は大きく3期に分かれると考えられ、茶色粘土を含んだ白色粘土が堆積した時期があり、次いで茶色粘土・黄褐色砂質土・茶褐色砂質土が順次堆積し、最後に黄褐色砂質土へ灰褐色砂質土が順次堆積した。最後の時期では、おそらく、前段階に堆積した埋土の層をさらに掘り込んだことが、断面の状況から判断される。T-8で検出した東西方向の落ち込みとは、同じ地山面を掘り込んでいることから、関連のあるものとも思われるが、方向に規則性がないので、古墳に関連する遺構とは考えられない。時期についても、遺物は全く出土しなかったので明らかにできなかった。

#### T-10

T-9の北隣りに設定したトレンチで、長さ4.0m、幅1.0mである。トレンチ北端で地表下約10cm、南端で地表下約30cmで地山に達する。遺物、遺構は検出できなかった。

#### b. 遺 物

今回の試掘調査では、トレンチ内での検出遺物はほとんどなく、僅かに表土より若干の埴輪細片を検出したのみである。ただ、昨年度からの高川氏採集資料は、今回の出土遺物を質量とともに凌駕するものであり、本報告ではこの採集資料を主体に述べる。同氏採集の遺物は約150点に及び、その内訳は、石器・須恵器・土師器・埴輪である。

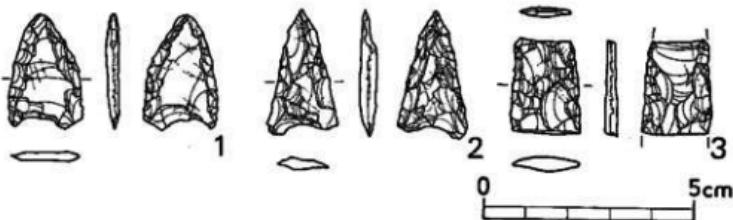
#### 石 器 (第6図)

石器は2号墳推定地の下方の南斜面で3点採集されており、石鎌2点、石器破片1点がある。いずれもサヌカイト製である。(1)、(2)の石鎌は結晶が目立ち、剥離面に強くフィッシャーが表現される良好でない石材を素材としているが、(3)は緻密で良質の石材を素材としている。

石鎌(1) 剥片の縁辺に急角度の調整を施して、釣鐘状に尖部を形成し、基部にはわずかな抉り部を整形している。表裏両面には大きく素材剥片の剥離面を残す。風化程度はやや浅く、弥生時代に属する可能性も考慮される。

石鎌(2) 左右両側縁が直線的に整形され、基部にわずかな抉り部を整形している。器厚は厚く、階段状剥離が認められる。風化の程度は著しく、绳文時代に属する可能性がある。

石器破片(3) 上下両端が折損しており、全形は不明であるが、尖頭器、ないし植刃状の



第6図 吉志部2・3号墳採集石器実測図

石器を推定することができる。左右両側縁はほぼ平行で、器厚は薄い。側縁には一部鋸齒状を呈している。縄文時代の所産と考えられる。

#### 須恵器・土師器（第7図）

須恵器は2号墳推定地下方斜面で検出された壺及び器台が特記される。双方とも同一地点で採集されており、遺物の時期相も同一であり、この両者は本来セットをなしていたと考えられる。

#### 壺（1）

口縁部を欠失するが、口縁部、体部が採集されている。口縁部径は13.4cm（復原値）、頸部径9.2cm、最大腹径20.1cm、口縁部残高2.4cm、体部残高15.4cmである。口縁部は上方にゆるやかに外反し、端部はやや鋭い。口縁端面下に6条を単位とする、やや細かい備描波状文を施している。体部は最大腹径が体部の底から%の位置にあり、腰高の器形である。最大腹径のある位置より少し上に、6

条を単位とする細かい

備描波状文が施されて

いる。体部中腹は1cm

あたり6本のカキ目が

横方向に施され、それ

以下は右上がりの平行

タタキののち、左上が

りの平行タタキが施さ

れている。タタキ目は

1cmあたり4本のやや

粗いものである。体部

の内面は、押圧調整と

ナデ調整が施され、同

心円タタキ目はすり消

されている。

#### 器台（2）

断片であるが、鉢部

及び脚部上半が復原で

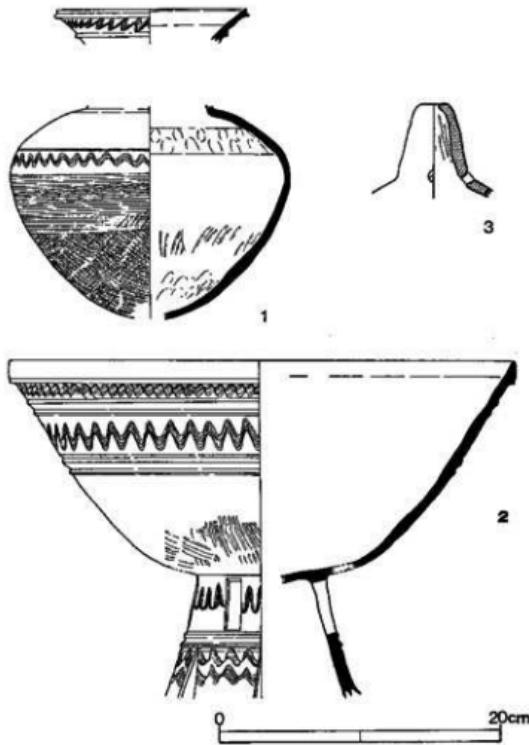
きる。口縁部径37.0cm

（復原値）、鉢部高14.6

cm、脚部基部径9.4cm、

残高9.0cmである。鉢

部は大きくラッパ形に



第7図 吉志部2・3号墳採集遺物実測図

開くもので、口縁部より一段下に11条を単位とする横描波状文、さらにその下に8条を単位とするやや細かい横描波状文を施す。外面の下半は1cmあたり4本の平行タタキを行っている。胸部は細く、長方形と三角形の透し孔が上・下段千鳥式に穿孔されており、上段に7条を単位とする横描波状文、下段に8条を単位とする波状文と7条を単位とする波状文が施されている。壺・器台とも焼成は極めて良好である。

#### 土師器高杯（3）

2号墳推定地の下方南斜面から出土した高杯脚部で、残高6.5cmである。裾部に直径8mmの円孔を穿っている。全体的に磨耗が激しく、特に外面の細部調整は不明であるが、内面には絞り目が残っている。色調は内外面とも淡褐色である。

#### 埴輪（第8図）

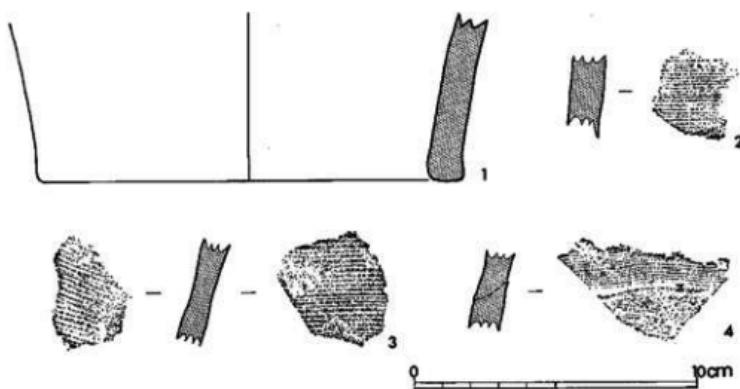
埴輪は最も量が多いが、斜面流土中のものが多く、磨耗が激しいため、円筒のタガの細部や器表の調整細部が明白なものがほとんどない。

#### 埴輪（1）

円筒埴輪の底部である。丘陵尾根突端の3号墳推定地から出土したものである。尾根平坦部より若干南へ下がった位置に、樹立した状態で検出されたということである。底径15.2cm、残高5.6cmを測る。やや外側へ開きぎみに上方に伸びる。器壁の磨耗が激しく、調整は不明である。色調は内外面とも淡褐色である。

#### 埴輪（2）～（4）

円筒埴輪の破片である。（4）は須恵質で焼成は堅緻であるが、その他は土師質である。外面はすべて細かい横ハケを行っている。（3）は内面にも斜めハケが認められる。（2）は透し



第8図 採集埴輪実測図(1:2)

孔の痕跡があり、内面は縦方向の指ナデを施す。色調は、(4)は淡灰色、その他は淡褐色である。

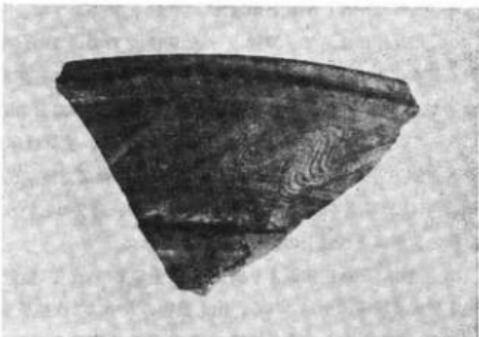
#### 4. 小 結

今回の調査は、遺物出土地点を考慮に入れ、古墳の主体部や外部施設の確認を目的として行ったが、古墳の具体的な遺構を検証することはできなかった。しかし、採集された地点からみて、2カ所に古墳が存在したのは明らかであり、しかも時期的にも、当地域が須恵器生産地として発展してゆく6世紀中葉を、さらにさかのぼる古墳時代後期前半の所産であり、従来の資料的な空白を埋めることとなった。

遺物の採集された南斜面については、今回は斜面流出土の防止策がとれなかつたことから、トレンチ調査が行えず、今後はこの部分について、遺物出土状態の把握を行う必要がある。

なお、埴輪を有する古墳は本市では初例であり、また後期前半期の古墳としても初例である。

本市の埴輪検出例は、垂水南遺跡、37号須恵器窯跡が特記されるが、前者は古墳時代前期～後期初頭の低地集落址である。また、後者は須恵器生産地であり、本墳より時期的に後出である。さらに多量の須恵器と共に性格不詳の片山公園遺跡はより後出的要素をもつ。したがって、本市周辺における古墳時代の最も空白期に本墳が該当するのは確実であり、古墳に止まらず今後の未発見な周辺の集落調査に、大きな課題が寄せられることとなった。



第9図 採集須恵器口縁部写真

## 第3章 吹田29号須恵器窯跡発掘調査

### 1. 調査に至るまでの経過

大阪平野北方にある千里丘陵は、丘陵北西部（豊中市域）および東南部（吹田市域）一帯を中心とした大規模な古墳時代窯業地帯（千里古窯跡群）であり、現在80カ所近くの窯跡が確認されている。<sup>(1)</sup> この窯跡群は実数では100基を超し、非常に密度の高い生産が行われておらず、5世紀末にみられる須恵器の需要の急激な拡大とともにあって開窯される諸窯跡群中では最大級の規模を有している。丘陵北西部の豊中市域の窯跡群は桜井義彰、笠井新也、藤沢一夫氏等の報告によって、早くから注意されていたのであるが、東南部の吹田市域の窯跡が注目されるのは遅く、昭和29年、府立吹田高等学校によって調査された駅廻ヶ池窯跡が最初の調査例である。<sup>(2)</sup>

その後、昭和30年すぎから鍋島敏也氏ほかによって、市内における分布調査が開始され、現在まで出口町から、片山、岸部、佐井寺、ニュータウンの南部にわたり、51ヶ所の窯跡が報告されている。<sup>(3)</sup> しかし、その前後より、大規模な開発が丘陵奥部まで急速に進行し、窯跡群は未調査のまま、次々と破壊されてゆき、さらに昭和36年には、名神高速道路が駅廻ヶ池・竜ヶ池・山の谷周辺の窯跡密集地帯を通過することとなり、駅廻ヶ池北岸ほかの須恵器窯跡が数基調査され、消滅していった。

そのような中で、昭和41年秋に、駅廻ヶ池南方の「紫金山」と称される、小丘陵の南端近くで、土取工事によって、窯跡の一部が破壊されているのが発見された。この窯跡は、鍋島氏の分布調査において29号須恵器窯跡として、昭和37年に確認されていたもので、工事は燃焼部を含めた窯の約4割を破壊して停止され、10月10日～31日の間に、府立茨木高等学校歴史研究部によって発掘調査が実施された。<sup>(4)</sup> 報告によると、窯体は半地下式無階無段の登窯で主軸方位をN-53°-Eにとって築かれており、その残存部で長さ6.2m、最大幅1.9m、焼成部床面の傾斜角は25°を測るが、破壊前は全長約10m、幅2mという規模が推定された。また、窯床は2枚、窯壁はそれ以上の重なりが認められた。

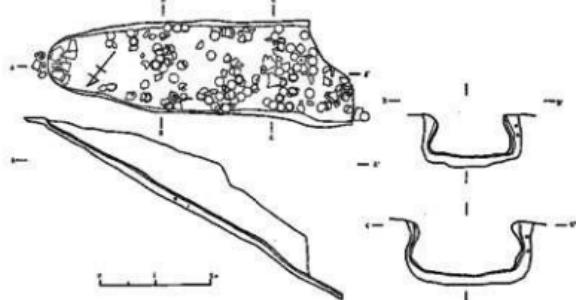
出土遺物は窯体内床面より約100点出土しているが、数量では杯・杯蓋が圧倒的に多く、陶邑Ⅱ型式4段階に比定される。出土遺物の大半は2次焼成を受けており、焼台として使用されたものが放置されたまま、魔窯に至ったものと考えられる。

窯体は発掘調査終了直後に破壊されたが、灰原は下方の竹藪となっているやや急な斜面に残存しており、長さ15m、幅17mの範囲に須恵器片、窯壁塊・炭の散布が認められ、各所に穿たれた盗掘場における観察によると、灰層は層厚50cm以上あり、2層に区分される部分があることが認められたという。

しかし、最近に至って、灰原の東北部が再度整地されたため、遺物が地表に露出するとともに、灰層の一部が崖面に露見した。さらには、すぐ間際まで住宅が建てられ、住民から遺物出

土の報告が相次  
ぐ事態となっ  
た。このように  
刻々と周囲の環  
境が変貌してゆ  
き、現状のまま  
放置すれば、灰  
原露出部分の遺  
物の散逸が続  
き、また崖面に  
残存している灰  
層も崩壊してゆ

くことから、早急に灰原部分の調査を実施して、遺物の散逸を防ぎ、記録に止める必要が生じ、  
今回の調査に至った。



第10図 吹田29号須恵器窯跡窯体実測図(昭和41年調査時)

## 2. 位置と環境

29号須恵器窯跡は、現在の行政区画では吹田市岸部北4丁目1067番地ほかに所在する。

当地は前期洪積層の隆起によって形成された丘陵地帯である千里丘陵の東南端にあたるが、東へは淀川の沖積平野に向かって開析する支丘陵が複雑に連なり、29号須恵器窯跡が位置するのも、「紫金山」と称される小丘陵の西端斜面である。

現在、紫金山の周辺には、南斜面に吉志郎神社、吹田市立第2中学校、同岸部第2小学校があり、北斜面には名神高速道路サービスエリアが設けられ、また、近年の宅地造成等の大小の開発によって旧状は大きく損なわれている。この丘陵は佐井寺の東部を起点として、東南方に標高40m前後で伸び、東方の沖積平野に突出する部分で、東南方および、駅ヶ池の南側を東方へ伸びる支丘陵に分かれれる。29号須恵器窯跡は、この両支丘陵にはさまれた谷の東側に位置している。

千里丘陵東南部の吹田市域では、今まで51ヵ所の須恵器窯跡が確認されており、その分布状況によって6支群に区分されるが、29号須恵器窯跡は支群中、最も東に位置する駅ヶ池支群に位置している。同支群では計8基が確認され、標高25mに位置する駅ヶ池を中心として分布する。しかし、現在では駅ヶ池南畔に位置し、昭和47年に関西大学考古学研究室及び吹田市史編さん室による調査後、現状保存されている2号須恵器窯跡を除いては、名神高速道路建設工事等によって、ほとんどが消滅した。

この駅ヶ池支群内の窯は、3号須恵器窯跡を除いて6世紀中葉から後半にかけて操業されており、本市域においては広範囲、かつ操業が最も盛んになる時期である。

その後、千里丘陵において活発な生産を続けた須恵器窯は、7世紀前半で、密集した窯業

地帶としては終止符をうつのであるが、29号須恵器窯跡が所在する支丘陵の南斜面には平安宮造営瓦窯である吉志部瓦窯跡が、さらに、この丘陵の東方200mには後期難波宮造営瓦窯である七尾瓦窯跡が所在しており、当地一帯は奈良～平安時代においても重要な窯業地帯としての性格を保ち続けたのである。

### 3. 調査の経過

調査は、昭和57年9月24日から11月13日まで、灰原の範囲及び灰層の堆積状況を確認することを目的として実施した。まず現状の地形測量を実施するとともに、灰原の展開範囲を確認するために遺物散布範囲に、十文字に4本のトレンチ(T-1～T-4)を設定した結果、T-1北東端において、薄い黒色灰層が認められたが、他のトレンチにおいては地山直上まで、近時の擾乱を受けており、灰層は検出されなかった。従って、一帯の旧状は予想以上に大きく変貌しており、灰原の展開は現在、地表に露出している部分を中心とした、比較的、限られた範囲



第11図 吹田29号須恵器窯跡周辺図(1:5000)

にとどまることが判断された。この成果によって、約7.0m×7.0mの調査区を設定し、その調査区内を2区分（G-1・G-2）して層位発掘に努めた。

調査は写真撮影・実測、さらに埋廻しをもって11月13日すべての調査を終了した。

なお、10月24日（日曜日）に、市民約50名の参加を得て現地を公開し、調査の状況を説明した。

#### 4. 調査の成果

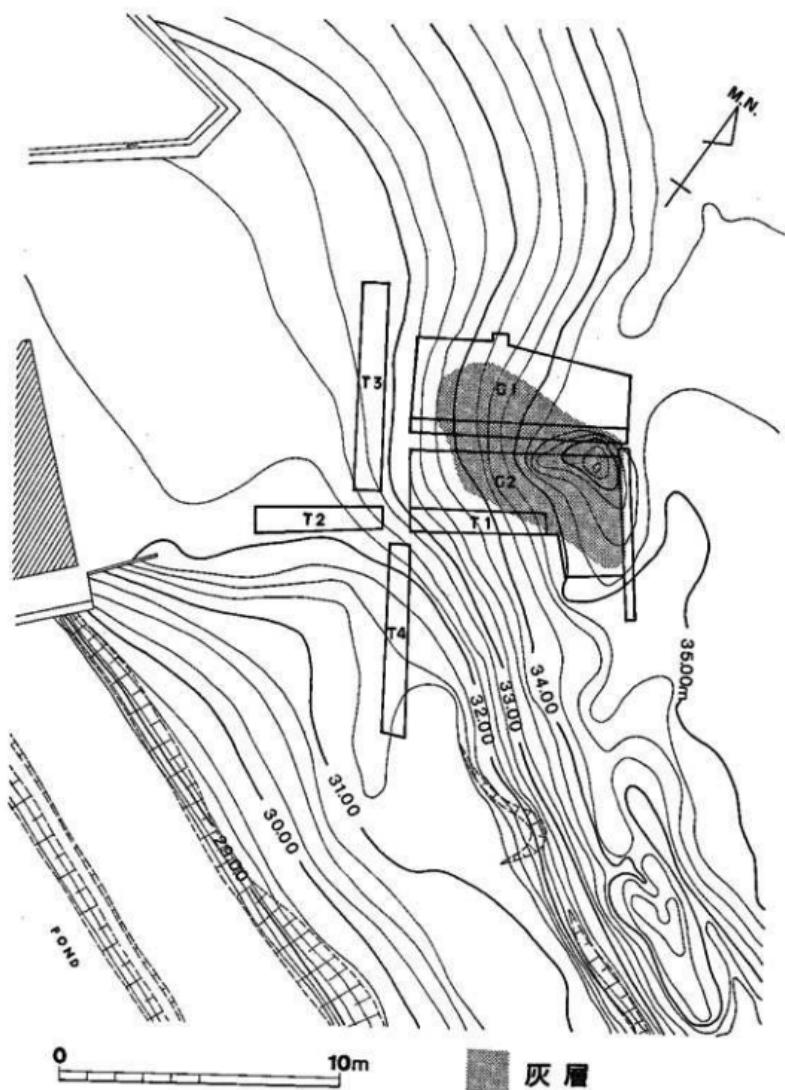
##### a. 調査結果

調査は、まず現状の地形測量より開始したが、調査地域は先述したように、度重なる造成等によって、窓跡の所在した部分は完全に削平され、現在灰原が露出している部分が、約1m高く残っている以外は標高35.5m前後で平坦化されている。さらに、西方のゆるやかな斜面は、近時に整地されたものであり、旧地形は大きく変貌しており、現在、竹藪となっている南方の比高差約4mの斜面のみが比較的旧状を残しているであろうと考えられたが、それでも、池畔に開墾された水田や竹藪独特の客土による後世の作為は明らかである。昭和41年の府立茨木高等学校による窓体の調査時には、残されていた丘陵最高所が標高43mであり、ここからほほ南面する斜面が現在の相合池に向かって下り、比高差15m以上の傾斜面をなしていた。この傾斜面の最上端に窓体の煙道部が取付けられ、全長約10mの窓体が構築された後、斜面中腹に灰原主要部が展開していたことが、開発以前の地形図及び今回の地形測量の所見から推測されるのみである。なお、灰原露出部分に大きな松の木が存在した。既に木は切り倒されて根しか残っていないが、この松の木が窓体発掘時には、窓体主軸線上に位置していたことが明らかにされており、この地点を参照して、窓体の旧来の位置及び主軸方位を復原すると、丘陵斜面に直交せずに構築されていることが指摘できる。窓体傾斜角度を工夫した痕跡がこれからもうかがえる。

灰層の展開状況を把握するために、斜面に対して、0.8~1.0m×4.5~7.0mのトレンチを十文字に設定した（T-1～T-4）。その結果、T-1の北東隅において、層厚20cmの黒色灰層及び、その下層に窓壁塊・炭が多量に認められる茶褐色砂質土（第4層）を検出した。しかし、第6層より上層は造成にともなう近時の堆積である。T-2～T-4においても、灰層は認められず、地山直上層まで造成にともなう再堆積土であることが判明した。

従って、灰原の展開は現在地表に露出している部分を中心とした限られた範囲にとどまるものであり、西方の斜面及び標高35.5mより下方は、近時の造成によって、旧地形は全く残っていないと考えられる。たとえ灰原が展開していたとしても、すでに散逸しており、また比較的旧状が保たれていると考えられる南方の斜面についても、灰原は広がっていないことが判明した。以後、調査は黒色灰層が露出している部分（G-1、G-2）を中心に、層位発掘を実施した。

この平面調査区において、黒色灰層は地山直下に検出されたが、堆積の最も厚い部分でも

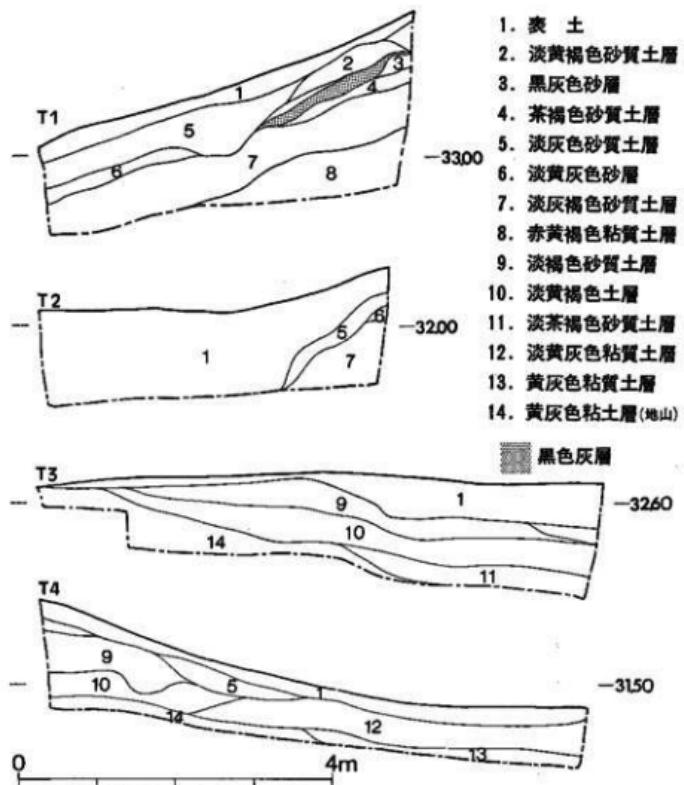


第12圖 次田29付須恵器窯跡地形実測図

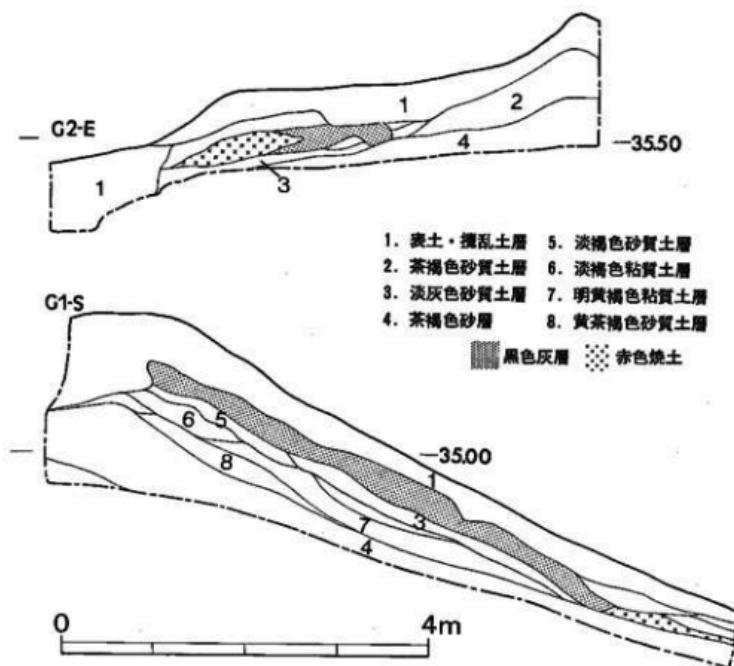
30~40cmで、その展開も6×7mの範囲を示すにすぎない。

この黒色灰層の周囲には、2次的な移動を受けた淡い灰層や遺物包含層が認められ、灰原の不動堆積部分はごく限られた範囲にとどまる。

しかし、灰層が最も良好に残るG-1、G-2間の土層断面の観察によると、黒色灰層の下層において多量に窓壁塊・炭が認められる層厚20cm程の砂質土層（第3・5層）が検出され、以下、若干の須恵器が認められる約20cmの粘土層及び砂質土層（第6～8層）の堆積が認められ、精良な砂層（第4層）に至る。また、調査区の各所において、窓壁塊が多量に認められる層厚20~30cmの赤色焼土層が認められ、これは操業途中に窓体の大規模な改修が行われたもの



第13図 吹田29号須恵器窓跡トレンチ土層断面図



第14図 吹田29号須恵器窯跡灰原土層断面図

と判断される。昭和41年当時の調査において、窯床が2枚、窯壁はそれ以上の重なりが認められており、赤色焼土層はこのような窯体改修時の廃棄層と考えられる。

なお、調査の結果、灰層の堆積層以外の造構は認められなかった。

#### b. 出土遺物

今回の調査においては、土器収納コンテナ60箱分の須恵器が出土しており、器種は杯・杯蓋・高杯・瓶・提瓶・短頸壺・すり鉢・壺等があり、中でも杯・杯蓋・甕が大半をしめる。以下、その代表的なものについて記すが、出土層位により、黒色灰層、黒色灰層下層の窯壁塊、炭等を多量に含む砂質土層（淡灰色砂質土・淡褐色砂質土）および灰原各所において、認められた赤色焼土層に区分して述べることにする。

なお、先述したように、灰原周辺部分の度重なる造成によって、灰原下方の斜面の表土層中には2次的な移動を受けた、多量の須恵器片が包蔵されている。これらは層序的な検討はでき

ないが、注目すべき器種も見られることより、灰原各層位から出土したものとは別に、最後に幾例かあげてみたい。

#### 黒色灰層出土遺物（第15図）

##### 杯 蓋（1～6）

口径は12.8cmから15.1cmを測るものまである。すべて口縁端部は丸くおさめられ、天井部から口縁部にかけて丸くなだらかなカーブを描く。天井部外面は回転ヘラ削りで仕上げられており、他は回転ナデ、ナデによって仕上げる。

##### 杯 身（7～9）

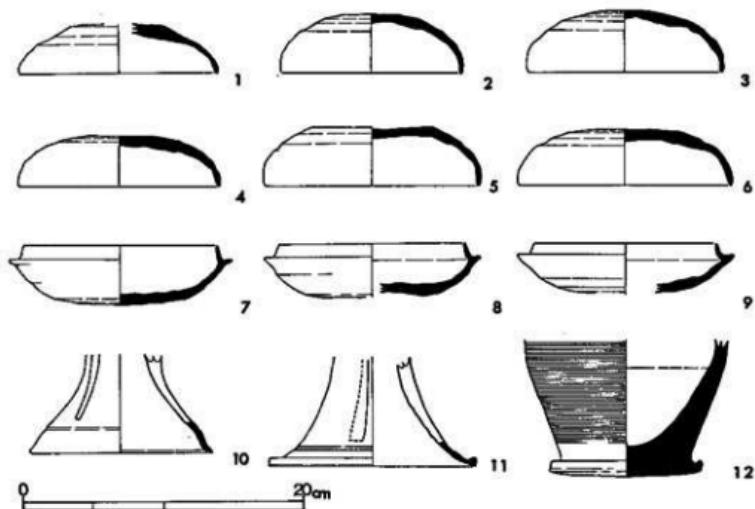
口径は13.0cmから13.8cmまでを測る。底部は平らに近く、たちあがりは、高さ0.8～1cmと比較的短かく外反気味に内傾する。口縁端部は丸くおさめられる。底部外面は回転ヘラ削りで仕上げられているが、他は回転ナデ、ナデによって仕上げる。

##### 台付蓋（10）

脚部の破片で、底径12.9cm。据部近くで、若干内側へ屈曲し、端部は内傾する平面を呈する。長方形のスカシ孔が3方向に穿たれる。壁が薄く、小型の壺の台脚部であろう。

##### 高 杯（11）

脚部の破片で、底径14.8cm。全体に太く安定感を与える。長方形のスカシ孔が三方に穿た



第15図 黒色灰層出土遺物実測図

れ、脚裾部には2条の凹線が巡らされる。

#### すり鉢 (12)

底部径10.9cmを測る大形のもので、器壁も厚い。体部外面には細かいカキ目を施す。

淡灰色砂質土・淡褐色砂質土層出土遺物（第16図）

#### 杯 蓋 (13~15)

(13) は口径14.8cmを測り、肩部に弱い凹線が巡る。他は黒色灰層出土の杯蓋とほぼ同様である。

#### 杯 身 (16~20)

(19)・(20) は口径13.8・14.2cmを測り、たらあがりは1.3cmと高く、外反気味に内傾し、端部を丸くおさめる。底部外面は $\frac{1}{2}$ 近くまで回転ヘラ削りで仕上げる。(17) の底部外面にはヘラ記号を有す。（第21図参照）

#### 蓋（高杯蓋） (21)

口径17.0cmを測り、天井部から口縁端部にかけて丸くなだらかなカーブを描く。口縁端部は丸くおさまる。

外面天井部から $\frac{1}{2}$ 近く、回転ヘラ削りで仕上げた後、細かいカキ目を施す。天井部には、径2.3cmのつまみを付す。

#### 高 杯 (22・23)

(22) は無蓋の高杯で、口径14.0cm。杯蓋様の器体を杯部としたもので、基部は太い。底部外面は回転ヘラ削りで仕上げた後、細かいカキ目を施す。

(23) は基部の太い短脚の高杯で、底径8.4cm。脚端は丸く折り返して仕上げる。

#### 提 瓶 (24)

口径6.4cmを測り、退化した鉤状の取っ手を付す。口唇部を表現せず、やや内傾させるのみ。

#### 壺 (25~27)

口径は17.3cmから24.0cmを測り、端部は肥厚して丸い。(25) の体部外面は平行タタキ目の後にカキ目を施す。内面には同心円文をのこす。(26) は体部内面に同心円叩き目をのこす。

(27) は口頭部はヘラ状工具による調整が認められ、体部外面に細かいカキ目を施す。

赤色焼土層出土遺物（第17図）

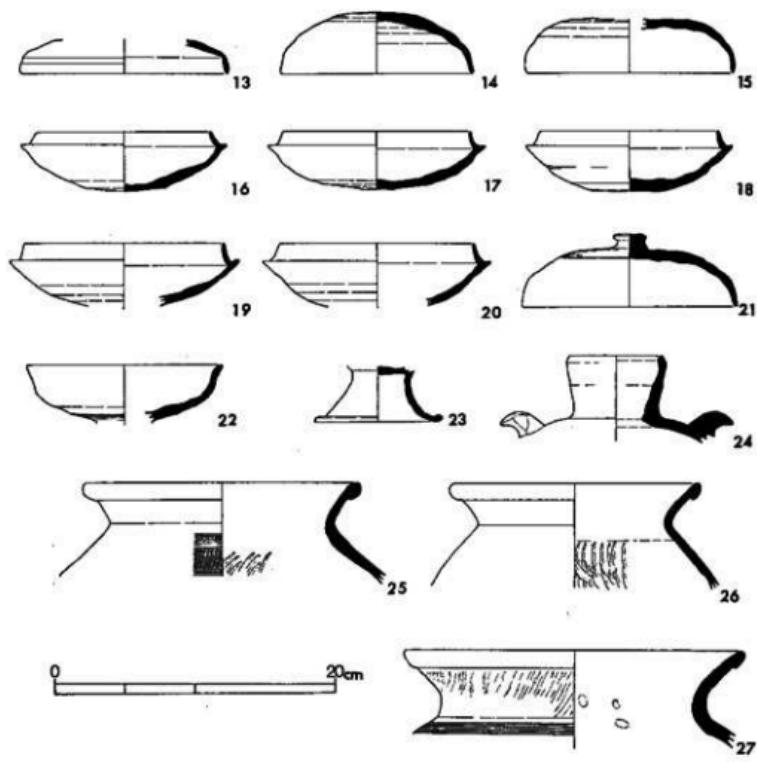
#### 杯・杯蓋 (28・29)

上記2層出土のものとほぼ同様である。

#### 高 杯 (30・31)

脚部の破片で(30) は底径11.4cm。基部は細い。長方形のスカシ孔が2段3方向に穿たれ、スカシ孔の間に、2条の凹線が巡らされる。

(31) は底径17.0cmを測り、全体に太く安定感を与える。長方形のスカシ孔が3方向に穿た



第 16 図 淡灰色砂質土・淡褐色砂質土層出土遺物実測図

れるが、脚部に凹線ではなく、簡素な仕上げである。

### 躰 (32)

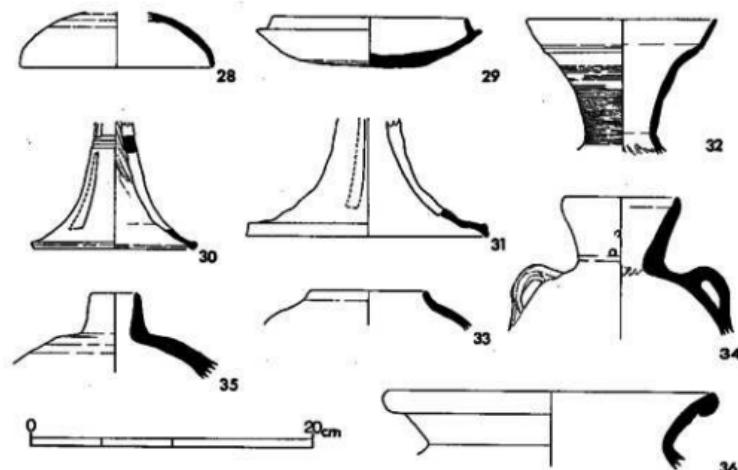
口頸部の破片で、口径13.5cm。頸基部は比較的太く、大きく外半する口頸部である。口頸部上方で段をなして外方へ伸び、端部は丸くおさめられる。頸部外面は細かいカキ目を巡らす。

### 短頸甕 (33)

口径8.2cmを測り、口頸部は内傾して短く伸び、端部は丸い。

### 提 瓶 (34)

口頸部は8.0cmを測り、環状の取っ手が付く。頸部外面には径0.5cmの竹管文が2ヵ所。



第17図 赤色焼土層出土遺物実測図

#### 蓋（蓋）（35）

壺の蓋と考えられるもので、径3.0cm、高さ2.9cmの環状のつまみを持ち、天井部は丸い。外面は回転ヘラ削りで仕上げる。

#### 甕（36）

口径23.0cmを測る小型の甕で、端部は肥厚して丸い。

#### その他の出土遺物（第18図）

2次的な移動を受けた遺物ではあるが、数例を紹介する。

#### 杯・杯蓋（37～40）

（37）は口径14.6cm。口縁端部内面に内傾する弱い段が認められる。

#### 高杯（41・42）

（41）は有蓋高杯で、基部の太い、外反する短い脚を伴う。（42）は長脚高杯の破片で、全体に太く安定感を与える。長方形のスカシ孔が2段3方向に穿たれ、スカシ孔間に2条の凹線を巡らす。脚部外面に細かいカキ目を施す。

#### 碗（43）

口縁部の破片で、口径13.4cm。大きく開く口縁部の外面にはヘラ状工具による直線文が認められる。

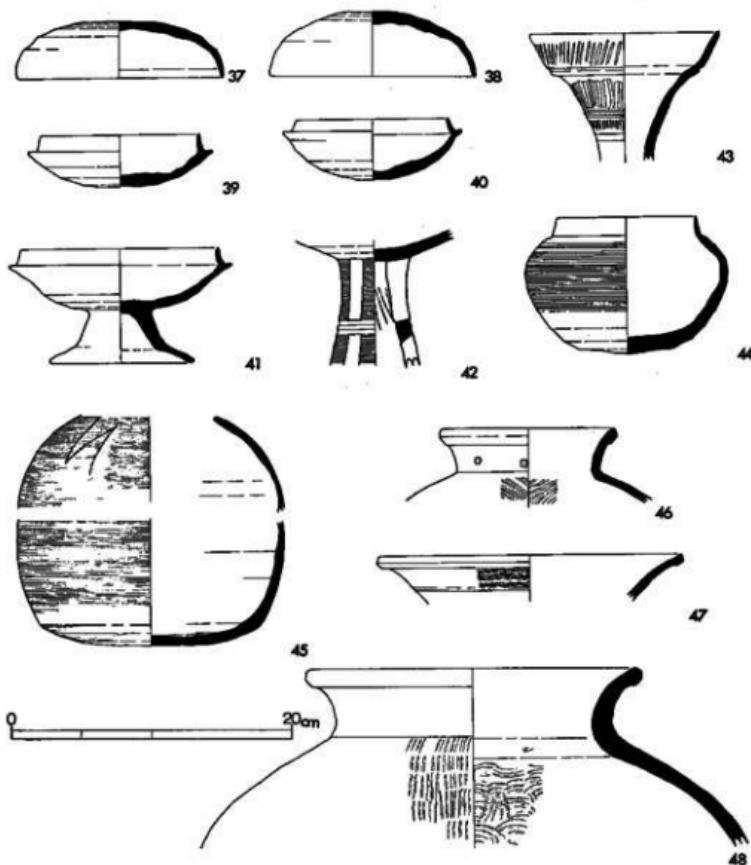
短頸壺 (44)

口径 9.8cm を測り、口頸部はやや内傾しながら直線状に伸び、端部は丸い。底部は回転ヘラ削り、体部はカキ目を施す。

壺 (45)

体部の破片で、体部最大径は、体部中央にある。肩部の張りは弱く、丸味を持ち、底部は平底に近い。底部は回転ヘラ削り、体部は底部を除くほぼ全面に細かいカキ目を施す。

肩部及び底部に同一のヘラ記号を有する。極めて稀な器形である。



第 18 図 その他の出土遺物実測図

### 壺 (46・48)

(46) は口頸部に径0.5cmの竹管文が2カ所認められる。

### 壺(長頸壺) (37)

(37) は細片のため、判然としないが、口径、器厚などからみて、長頸壺口縁部とみられる。

なお、今回の調査における出土遺物のなかでは、須恵器以外に注目されるものとして、以下のものがある。

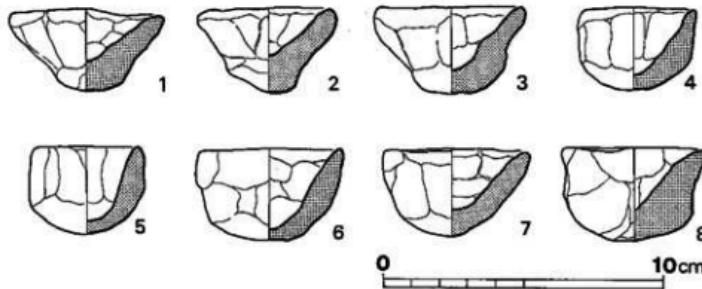
### 琴柱形土製品 (第19図)

表土層より出土した、2次的な移動を受けたものであるが、壺の体部の小片を琴柱形に整形し、須恵質に焼成したもので、長さ、幅とともに3.8cmを測り、上端には切り込みが認められる。未焼成品の体部断片を焼成前に整形していることから、琴柱として意識して製作したものであろうが、遺例が少ない。製品の表裏には壺特有の平行タタキ目、同心円タタキ目が認められる。

### 手捏ね土器 (第20図 1~8)

G2北壁近くの赤色焼土層中より、土師質の手捏ね土器が出土した。出土状況は、窯壁及び、須恵器片と混在した状況であることより、他より混入したものとも、祭祀が行われたものとも考えられず、窯で焼成されたものが他の遺物と共に廃棄されたものと判断され、非常に注目される。

手捏ね土器は破片で計12点分出土しているが、8点がほぼ完形に復原できる。口径は3.7~5.3cm、器高は3.0~3.4cmを測り、その形状は不整形ながら口縁部が外反しているもの(1~3)と、椀形におさまるもの(4~6)があり、一応、器種の差を表現しているようである。その胎土、色調は須恵器の焼成不良品と全く同一で、明らかに、須恵器の生産工房で製作され



第19図 琴柱形土製品実測図 (1:2)

たものである。色調はあざやかな赤褐色を呈するが、全製品が均一に焼成されているところから、意図して酸化炎により、土師質に焼成されたものと判断される。

表2 手捏ね土器観察表

番号	法量	個々の特徴	備考
1	口径 5.3cm 器高 3.0cm	底部より外程で、外反して伸びる。 指オサエによる調整。	色調 淡茶褐色 焼成 軟質
2	口径 4.5cm 器高 3.1cm	口縁部は外方へ開きながら上方へ伸びる。 指オサエによる調整。	色調 淡茶褐色 焼成 軟質
3	口径 5.0cm 器高 3.1cm	底部より外程で、口縁部は大きく外反して伸びる。指オサエによる調整。	色調 淡茶褐色 焼成 軟質
4	口径 4.2cm 器高 3.0cm	底部より外程で、ほぼ垂直に伸びる。 指オサエによる調整。	色調 茶褐色 焼成 軟質
5	口径 3.7cm 器高 3.2cm	口縁部はほぼ垂直に伸びる。 指オサエによる調整。	色調 淡茶褐色 焼成 軟質
6	口径 5.0cm 器高 3.3cm	口縁部は内弯気味に伸びる。 指オサエによる調整。	色調 淡茶褐色 焼成 軟質
7	口径 5.3cm 器高 3.2cm	口縁部は大きく歪む。口縁部は内弯気味に外方へ伸びる。指オサエによる調整。	色調 淡茶褐色 焼成 軟質
8	口径 5.0cm 器高 3.4cm	口縁部は大きく歪む。底部より外程で外反して伸びる。指オサエによる調整。	色調 淡茶褐色 焼成 良好

## 5. 小 結

29号須恵器窯跡は昭和41年時の発掘調査において、その成果が報告されているが、窯体内出土物は、操業最終段階の資料であることから、今回の灰原部分の調査によって、本窯の操業期間及び経営実態が、さらに詳細に解明されることが期待された。

しかし、調査地区一帯は度重なる造成のため、灰原の遺存状況は予想以上に悪く、灰層の不動堆積部分は限られた範囲にとどまり、灰原を層位的に発掘できたのも極一部であった。

出土した須恵器については、灰原の遺存の良好な部分における層位発掘の結果において、灰原各層間においても、さらに、操業の最終段階の資料である窯体内出土遺物とも、明瞭な形態差は認められず、全般に出土量の大半を占める杯・杯蓋の検討より、陶邑Ⅰ型式4段階に比定される。<sup>16)</sup>

ただ、一部には、口縁端部内面に内傾する段が認められる杯蓋(37)や、環状の把手を付す提瓶(34)のように古い様相を呈するものが認められるが、全体の数量からみると極微量であること及び出土した層位より考えると、時期的な差を考えるよりは、前型式の遺物を残すものが、一部製作されていたか、あるいは、南工の末期テクニックが、さほど意識されずに表現されていた時期とも考えられ、この傾向は同一支群内の2号須恵器窯跡でも報告されている。<sup>17)</sup>

従って、本窯出土の資料は、次田市域の須恵器生産が最盛期を迎える時期のものであり、同

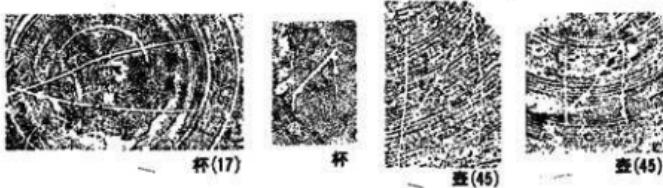
時に器形変化も少なく、6世紀代では最も安定した形状を示す時期である。これから考えると、該当期の土器形態は、一つの窯の操業期間をしぶぎ長期にわたって、安定したものであったと考えられる。

また、杯及び壺の一部には、ヘラ記号を有するものがみられる（第21図）。杯に関しては、窯体調査時に確認されたものを含めて6種類以上が、壺・壺は各1種類が現整理段階では確認されている。特に壺(45)については、肩部及び底部に同一のヘラ記号が認められる。

ヘラ記号については、本窯では杯を中心とした、極少量に限られることを指摘するにとどめるが、これは本窯のみに限らず、千里古窯跡群全般に認められ、陶邑古窯跡群とも同一の傾向を示す。

最後に、本窯の位置する支群内には、昭和48年に調査され、現状で保存されている2号須恵器窯跡が所在しており、本窯と比較検討すると、ほとんど同一の様相を示す。それは杯・杯蓋・壺が大半を占めるという生産器種の構成、及び一部ではあるが、古い様相を遺す器形が製作されていることや、操業時期に関しては、窯の操業期間内で、その前後の段階の形態を示すものが認められず、一つの窯の操業期間をしぶぎ、長期にわたる安定した土器形態が生産されており、これらの諸点は、この時期の窯業経営の実態を示すものとして指摘しておきたい。

また、須恵器以外でも、土師質の手捏ね土器という祭祀用土器の出土もみられ、須恵器生産集団の性格を考えていく上でも、注目される成果がみられた。



第21図 ヘラ記号拓影 (1:2)

## 第4章 垂水南遺跡発掘調査

## 1. 位置と環境

垂水南遺跡は、吹田市垂水町3丁目一帯の標高3m前後の沖積平野に位置する低地複合集落址である。従来の20数次にわたる調査によって、遺跡範囲は南北600m、東西200mの広範囲にわたり、しかも古代の条里造制を伝える東西南北の方格地割に対して、約30°西へ振って遺跡は展開していることが判明している。遺跡の時代相は、概ねⅠ～Ⅳ期に分類されているが、このうち、中核となるのは、Ⅲ期（古墳時代集落）、Ⅳ期（平安時代初頭水路・莊園関連遺物）、Ⅴ期（鎌倉期を主体とする水田遺構）で、各々の時期の前後でも、遺構等の詳細は不明であるが、遺物の出土が散見されており、集落としての何らかの展開があったものと考えられる。

遺跡の標高は、古墳時代遺構面で、約1.5mしかなく、河道底部では1m以下のところもあり、極めて低位に居を構える集落であったといえる。したがって、住居などの展開は、わずかな微高地を避けて構築され、河道、建築遺構、溝などは自然環境の大きな制約をうけ、集落の展開に沿って、南北方向より30°~45°掘ったものが多い。

したがって、集落としての立地条件は決して良好でなく、古墳時代後期及び平安時代初頭に



第22図 亥水南遺跡周辺図(1:5000)

相当する層位には、遺跡各所で白色粗砂層が検出されており、この時期に当地域に大規模な洪水があったとみられている。

このような集落立地としての不利な点を考慮してもなお、本地域の歴史的な位置づけは大きなものがある。それは、当該は本市で始めて文献上に地名を刻する地であり、その後の莊園関係史料を主とした文献記載の豊富さからも窺い知ることができる。

一方考古学的な遺跡の分布をみると、垂水南遺跡（12万m<sup>2</sup>）を中心に、北方丘陵上に展開した弥生時代、中世期の複合遺跡たる垂水遺跡（15万m<sup>2</sup>）、そして、西方に展開する藏人遺跡（弥生、古墳、中世期複合遺跡、8,000m<sup>2</sup>）など、本市を代表する大集落遺跡が当地周辺に集中しており、それらの遺跡群は、猪名川左岸の西傾東半の遺跡群と密に連係を示しながら、その東端の一画を占めているのである。

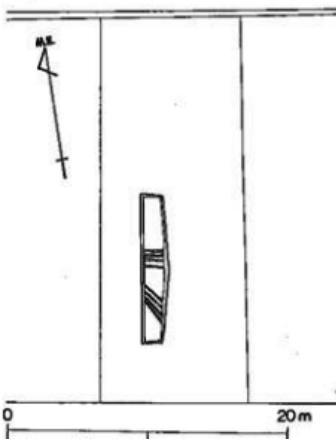
本市の東半、島下郡域の重要遺跡が、須恵器窯跡群、あるいは奈良・平安期における造宮宮瓦窯跡群であり、その性格が特殊かつ時代的にも限定されるのに比し、本地域の集落を中心とした遺跡の展開が、性格的にも時代的にも、相互有機的関連を示していることは明白であり、本地域の歴史的性格を明瞭に示しているといえよう。

## 2. 調査の成果

**土層序** 試掘場は南北方向に、長さ10.5m、幅1.5mのものを設定した。当該地は、前面道路高に至るまで、約0.8mの厚さの近時に行われた盛土があり、旧水田面以下の基本層位については、本遺跡における他の調査区とはほとんど変わらない層位を示している。

表3 土層序一覧

No.	土層名	層厚(m)	時代区分
1	盛土	0.8	現代
2	黒色土(水田面)	0.25 ~ 0.30	現代
3	灰色粗砂層	0.10 ~ 0.15	近世
4	灰色粘土層	0.15 ~ 0.20	中世
5	暗灰色粗砂層	0.05前後(最大)	平安初頭
6	暗灰色砂層	0.2 ~ 0.3	平安初頭
7	暗灰色粘土層	0.2(平均)	古墳時代
8	炭化り黒灰色粘土層	0.08 ~ 0.1	古墳時代
9	暗灰色粘土層	0.2	古墳時代
10	青灰色砂層	不明	古墳時代



第23図 垂水南遺跡トレンチ配置図

本遺跡において、特に注目されるのは、第Ⅶ期に相当する4層、第Ⅷ期に相当する6層、及び本遺跡の主要部を占める古墳時代の7～9層である。

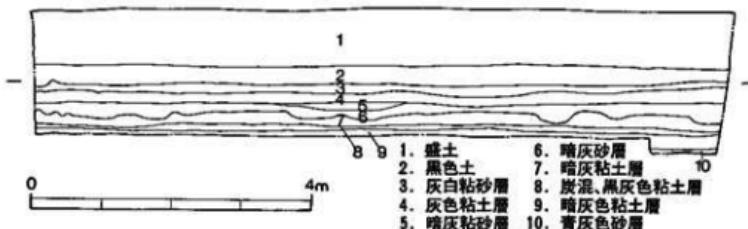
しかし、2～4層の間は、極めて平準な土層の堆積を示し、かつ、中世水田跡跡のあらわれる5層下位には、何らその徵候はなく、本地点においては中世水田遺構は検出されなかったといえる。

次に、その下層は直ちに暗灰色砂層（平安初期）に達するが、この砂層は、他地点でみられるよりも層厚が大きく、かつ部分的に、層厚30cmにも及ぶ落ち込みがみとめられた。この落ち込みは、4条の溝状をなし、そのうち北側の2条はほぼ東西に、南側の2条は、約35°西側へ振って形成されており、一応40～50cmの幅を測ることができる。

しかし、溝の肩部があまり明確にあらわれず、溝壁の形状も一様でなく、人為的な溝と判断しにくい面があり、また、溝内の堆積土も上層と同質であり、洪水等の出水時の一時的な所産とも考えられる。

以下、古墳時代の所産と考えられる7・8・9・10層が平準に堆積している。このうち、7・8・9層は、他地点では古墳時代土器包含層、あるいは遺構形成面に相当する重要な層である。この3層は、間層として炭化物を含む最も黒色化の進んだ層（8層）をはさんで、灰色粘土層を形成する点においても、他地点の所見とほとんどかわりがない。しかし、9層は、遺物細片とともに、植物の遺体も含む粘性の高い軟弱な粘土層で、本地点の西方で展開している硬質のベースを形成しない。したがって、遺物の依存度の悪い点をも考えて、本地点では遺構の残存する可能性を、否定する層相を示したといえる。

10層は、本遺跡で普遍的にみられる含水率の高い青灰色砂層である。トレント南端において、本層より木製品断片が1点出土したが、本地点に流れついたもので、本来の位置を示すものではない。掘削によって著しい出水を示すので、発掘はさらに深層までは実施できなかった。



第24図 亜水南遺跡土層断面図

### 3. 小 結

今回の調査では、明確な遺構・遺物を検出することができなかった。特に、本地点の東方30mの地点で行われた第24次調査では、濃密な古墳時代土師器群が検出されており、近接した地点でもきわめて差異に富む所見を示したといえる。既に従来の調査で指摘されているように、低位に立地する本遺跡の特徴として、自然条件に大きく制約され、限られた範囲にしか居住域をもてないことを、これらの調査所見は示しているようである。

今回の調査で、やや目立った所見を示したのは平安時代初頭の砂層が、他地域より厚いことである。あるいは自然河道内を発掘している可能性も捨てきれないが、10mに及ぶトレンチ内において、何の変化もない層相からみると、自然地形の凹部に一挙に洪水等によって粗砂層が運ばれてきたと考える方が妥当であろう。

なお、この粗砂層の存在は、ただ単に平安時代の初頭に洪水があったことを示すに止まらない重要な意味をもっている。その理由は、本遺跡の第5次調査では、洪水によって一塊に埋没したと思われる旧河道内より、「垂庄」・「中庄」と莊園名を銘記した墨書き土器が検出されたのである。このうち、「垂庄」は弘仁3年(812年)立莊の東寺領垂水莊を示すことは明白である。この墨書き土器の検出に際しては、多量の土師器・須恵器・施釉陶器・木器・瓦など、また他の地点からは掘立柱とみられる建築用材が出土するなど、この砂層は垂水莊の立莊時点での文献上の未解決な問題を解明できる重要な層位なのである。そして、今回の調査所見のように、これに該当する粗砂層を、文献記載上の内外・周辺において縦密に検証してゆくことは、立莊当時の莊園をめぐる自然環境の復元に非常に有効な方法となりうると判断される。

## 第5章 昭和57年度緊急発掘調査の成果をうけて

### 1. 吉志部2・3号墳発見の意義

市内岸部北5丁目住の高川義明氏によって遺物の採集が報告された吉志部2・3号墳については、当地が史跡公園の隣接地であり、かねてから埋蔵文化財の調査活動が多く実施されてきた地域であった。しかし、この発見は過去の周辺におけるいくつかの調査所見から考えても、従来にない新規の発見であった。

既に、吉志部古墳（1号墳）の調査の際には、当墳は立地・規模・構造等から、単基で存在すると考えるより、他に複数の古墳が存在した可能性があると指摘されていた。<sup>(6)</sup>

すなわち、1号墳周辺に石材の散乱する地点があること、また、現実に同一丘陵内で、鉄鎌の発見地点や、須恵器・鉄片の発見地点があり、それらは、いずれも古墳の立地として好適であること、また、他に1個所が古墳推定地点としてマークされている丘陵頂部が存在することなど、いずれもこの指摘を裏付けるものである。当地が淀川・安威川の広大な沖積地を見下ろす千里丘陵の最尖端部であり、地形的にも古墳適地であることは明らかであるが、それ以上に、この「吉志部」の地は古代に主として外交使節として広く活躍した「難波吉士」の居住地として推定する論がふるくからあり、吉志部2・3号墳の東南にあって、境内の一角に吉志部1号墳をもつ「吉志部神社（太神宮）」は、この難波吉士の祖神を祀ったものであろうと、天坊幸彦氏は述べているのである。<sup>(7)</sup> このような経過もあり、当地の古代における歴史像は、高く評価されている。

たしかに、考古学的所見をみても、当地は旧石器・縄文時代の吉志部遺跡を最古例として、古墳時代須恵器窯跡群、さらに聖武朝・桓武朝における大規模な造宮瓦窯跡群と古代火葬墓の存在など、2つの国指定史跡をはじめ、淀川右岸でも極めて特色ある地域を構成する。

しかし、考古学的な見地から、たとえ本地域に展開する須恵器窯が渡来人系陶人集団によって經營されたと仮定しても、短絡的に難波吉士伝承と結びつく根拠がないばかりか、従来の調査所見からみても、この吉志部の地が、本市域の須恵器生産の開始と発展に、主導的役割をはたしたということを積極的に示す根拠がなく、むしろ、本地域の窯跡は、市内の他の支群に比べ、後次的な展開を示すとされているのである。千里丘陵における須恵器窯跡の分布範囲や經營規模からみて、当地域の一邑の氏族伝承にとらわれないもっと広い視野をもってみるべきであろうと思われる。

さらに、当地で最も重視されている遺跡は、国の史跡となっている七尾・吉志部の両瓦窯跡である。すなわち、聖武・桓武崩御の造宮用瓦窯が同一丘陵内に近接して存在するという、淀川流域に展開する古代窯業遺跡の中でも、きわめて特色ある地域を形成しているのである。しかし、この2つの重要瓦窯も、前者にあっては限られた瓦范しか有せず<sup>(8)</sup>、また後者にあって

も、平安宮造営にかかる極初期の所産であるとされていることなど、<sup>(9)</sup> 限定された供給対象に対する短期間の操業にかかるものとされており、計20基を越えるこの一大瓦窯跡群も、当地の古代寺院に対して瓦を供給されたものでないばかりか、国家的な造宮事業の一環として起業されたものであるだけに、その時期と性格が限定されているのである。つまり、この2つの重要遺跡からして当地域の古代史像の一端は捉えることができるが、意外にも、遼有の古代集落遺跡が発見されていないことによって、当地の経済的な発展の過程を物語るには著しい資料の不足をきたしているのである。そのためには、当地の集落跡の調査が不可欠なのである。

もう少し広い範囲をみて、安威川右岸の周知されている平地集落址をあげると、南から都呂須遺跡（弥生・鎌倉以降）<sup>(10)</sup> と、国鉄吹田操車場・国鉄次田工場遺跡（いずれも鎌倉）<sup>(11)</sup> がやや離れて存在するのみで、確かな集落址は近辺にはみられない。しかも、これらは古墳時代のものではない。ただ、実態不詳の遺物散布地も含めると、岸部中4丁目の須恵器出土地<sup>(12)</sup> ほか、若干の地点はあるが、それでもなお本市の須恵器生産開始期以降のものであって、今回発掘した吉志部2・3号墳出土の古式須恵器に相当する遺物出土地は1カ所もみられない。

しかし、本墳から比較的近距離にある摂津市域に眼を転ずると、ちょうどこれに該当する時期の遺物の出土がみうけられるようである。摂津市庄屋1丁目（旧味舌村庄屋）における遺物出土地、千里丘4丁目における遺物出土地（旧味舌村西出口及び旧味舌村上藤の木）などがあり、ちょうど本古墳から1km余の地点に位置している。しかも3カ所のすべてが、時期的にも本墳に類似する古式須恵器の出土地である。これらはすべて採集資料であって、遺跡の詳細は不明であるが、ほとんど実相の把握ができなかった該時期のまとまった出土品をみるとすべき地域である。

この地域は、開析谷が最も丘陵の深部まで発達し、丘陵東南を東に向けて流れる小河川のなかでは最も流量の多い山田川が、淀川・安威川の沖積平野に流下し、その流域の微高地に上市場・味舌上・庄屋・味舌下の旧各村を配したことであり、この川は吉志部2・3号墳の直下を東南流する正雀川と競合して、一带に生活適地である微高地を形成する。この微高地を生活立地とする古墳時代集落を背景にして吉志部2・3号墳が成立したものとみられる。すなわち出口古墳の直下にあたる吹田砂堆部と、弥生時代以来における拠点集落である東奈良遺跡（茨木市）<sup>(13)</sup> のちょうど中間に位置する吹田・摂津の市境周辺沖積平野に、古墳時代後期前半期のまとまった集落址が存在する可能性のきわめて高いことを、今回の吉志部2・3号墳の発見は物語っているといえよう。

次に、吉志部2・3号墳の墳形規模や内部構造についてであるが、試掘調査では具体的な所見を呈示することはできなかったので、立地・遺物出土状態・出土遺物などから、本墳の当初の姿を推論するほかない。まず古墳の立地条件からみると、大規模な古墳が築造されるような地形でなく、小規模な古墳が尾根上に並んでいたと思われる。内部構造においても、石室の用材となるような石材が認められること、また、当地の諸条件から推定される墳丘規模からみても、木棺直葬など簡易な構造のものであったと考える方が妥当と思われる。

遺物については、調査において古墳に関連するものは認められていないが、本墳発見の契機となった採集資料として、須恵器の壺・器台・土師器の高杯がある。これらの土器は墳丘頂部後の流土内に含まれていたと考えられるが、まとめて採集されているところから、墳丘の裾部、あるいは墳頂部に、まとめて置かれていたものが、墳丘盛土とともに、斜面に崩れ落ちたものと考えることができる。

このような推定が正しいならば、大阪府下では、大東市堂山1号墳<sup>10</sup>、藤井寺市野中古墳、高槻市岡本山A—3号墳などの類例をあげることができる。堂山1号墳は大東市寺川に所在し、生駒山地から派生した尾根上に展開した総数8基の堂山古墳群に含まれ、この1号墳が径25mの円墳で、埴輪を囲らし、木棺直葬であるのに対し、他の古墳は小規模な横穴式石室を有し、内容的にも、時期的にも大きな断絶がある。この点においても吉志部2・3号墳と吉志部1号墳の関係に類似するかもしれない。なお堂山1号墳では墳丘裾部で、壺・器台・高杯をセットとする古式須恵器群が検出されており、これらの須恵器は時期的にも大阪南部窯跡群では最古型式に近いと考えられるものである。内部主体の出土遺物から、五世紀中葉頃の年代とされている。

野中古墳は、藤井寺市野中にあり、あたかも墓山古墳の陪冢であるかのように存在する方墳である。内部主体は墳頂直下にある木櫃で、墳頂には高杯・台付壺・器台など多数の陶質土器があったことで注目された古墳である。

岡本山A—3号墳は、高槻市岡本の丘陵斜面にあり、墳形は明らかではないが、木棺直葬を主体部としている。墳頂内に落ちこんだ状態で、器台・壺・高杯・珠が検出され、いずれも最古式に属する須恵器であり、土師器の壺・高杯も存在した。埴輪が検出されていない点は吉志部2・3号墳と若干性格を異にする。

以上、わずか3例であるが、府下の例を加えて、本墳の実相を検討したい。

須恵器を墳丘裾部に供獻しているのは堂山1号墳であり、墳丘頂部、特に埋葬施設の直上に供獻しているのが、野中古墳・岡本山A—3号墳である。ただ野中古墳の場合は主体部内へも小型壺を主とする陶質土器群が埋納されており、陶質土器の位置が明らかに、二つの場所に区分されて埋納されている。このような内部主体へ須恵器を持ちこむ行為は、以後の横穴式石室の本格的導入によって普遍化されてゆくが、主体部内への副葬以外では、このような、墳頂部への献納、墳丘裾部への献納の二つのタイプが存在したのは事実であろう。そして、そこで祭祀的行為が行われたのは確かであろう。

須恵器を墳頂部へ置くことは、墳丘裾部へ供獻することよりも、供獻という行為が強く意識されたのか、あるいは、墳丘裾部から墳丘頂部へ再度持込む行為があったのか、祭祀の内容にかかる問題として重要であろうが、充分な説明はなされていない。

遺物の構成をみると、いずれの古墳も須恵器の壺・器台・高杯をセットとしていることは相違ない。吉志部2号墳では、壺・器台のみで、須恵器の高杯は検出されていないが、土師器の高杯（脚部破片）が検出されている。岡本山A—3号墳では、土師器高杯と須恵器高杯の両者

が存在しており、採集はされなかったが、吉志部2号墳も須恵器の高杯が存在した可能性があることを指摘しておきたい。

須恵器を供獻する場合、それを破砕する場合も認められているが、破砕することは、そのもののもつ機能を失わせることとなり、これは、現世と冥界との明確な区分をする行為であり、その風習の一部は、現在でも行われている。さきにあげた野中古墳、岡本山A-3号墳については破砕されている可能性があるが、吉志部2号墳の場合は、発掘調査による資料でないので、この検証はきわめてむつかしい。須恵器壺については、口縁部を欠くものの、大略復元できる姿で採集されており、破砕されていないらしいが、壺台については遺存状態がわるく、これは破砕されたためか、あるいは後次的な移動をうけたためかは、全く不明といわねばならない。

このように、今回の調査所見や採集遺物のみでは、本墳の旧状の復元には、多くの課題がのこされるが、千里丘陵内においても時期・内部主体・副葬遺物などの点から、かなり稀有な古墳である可能性が高く、重要な古墳であることは事実であろう。

## 2. 29号須恵器窯跡発掘調査の成果から

29号須恵器窯跡は先述したように、昭和41年秋に窯体部分が発掘調査され、窯体部分はその後に完全に破壊され、灰原部分のみが残存した。調査成果については、直ちに調査報告が出版され、後に刊行された「千里古窯跡群」には正報告が掲載された。その成果は、さらに「吹田市史第8巻(考古篇)」にも収録され、現在に至っている。

これらの成果の中において、出土遺物については、本市における須恵器窯跡群経営段階における第Ⅰ段階の典型窯として、形態的に最も盛期の最も安定した態様を示すものとされている。

さて、今回の灰原の発掘調査については、第3章で明らかにしたように、昭和41年以降の幾度もの地形の変化により、灰層の遺存状態は予想以上に悪化していた。したがって、遺物については、多くは2次的な移動を受けたものであった。しかし、この中で特記される遺物が二種あり、以下、それらについて述べてみる。

その内、一種は灰原中から検出された琴柱形土製品である。これは須恵器の臺(あるいは横瓶等かもしれない)の体部破片の焼成前に破損したものを再成形したものと判断される。当然ながら、表面に須恵器臺に特有な平行叩き目、同心円叩き目が残されており、また臺の体部独特のゆるやかな弯曲があり、この製品が転用品であることを物語っている。また、頭部には絞の通る細溝があり、実用品であるように見受けられる。

琴柱の実例としては古墳時代のものとして、滋賀県服部遺跡(中期)および、湖西線関係遺跡V区(後期)出土の木製の例がある。服部遺跡では、方形周溝基の周溝から木製の琴本体と共に併せて4枚出土しており、琴柱の使用例を示す重要な資料である。琴柱は高さ2.0cm、幅3.2cm、厚さ1.0cmを測り、脚底部は平らで、側面台形を呈し、安定した形態を示す。湖西線関係遺跡V区では竪穴住居址から単独で出土しており、高さ1.9cm、幅3.4cm、厚さ1.3cmを測る。側面は三角形を呈し、脚底部は浅く切り込み、両脚を作り出している。また、同遺跡からは平

安末～中世の包含層からも一点出土しており、高さ2.2cm、幅3.9cmを測るが、厚さ0.4～0.6cmと偏平なつくりであり、脚底部の切り込みも若干深くなる。いずれも、頂部に絵を受ける溝が認められる。木製品以外には、福岡県沖ノ島第5号遺跡から、金鏡製品が難形の琴に伴って5点出土しており、7世紀後半のものと考えられる。側面は台形を呈するが、脚底部を切り込んで両脚を作り出している。

このように、琴柱そのものの出土例は非常に少なく、断定はできないが、服部遺跡出土例のように厚く、脚底部が平らなものから、偏平で脚底部を切り込んで両脚を作り出したものへ、さらには皇大神宮の琴に使用されているような三叉形の琴柱への形態の変化が推定できるのではないかであろうか。

また、29号須恵器窯跡出土の琴柱は土製品であり、単純な比較はできないが、同時期の湖西線関係遺跡V区出土の木製品に比べて、形態的には皇大神宮等にみられる三叉形の琴柱に近く、より進んだ形態を示すともいえるが、これは木製品に比べて、加工のしやすい土製品であることに関係するのであろうか。

一方、古代の琴に関しては水野正好、佐田茂氏によって詳細に論究されているが、正倉院にみられる伝世品以前の資料は非常に限られており、埴輪に表現された例や、沖ノ島等の祭祀遺跡出土の難形等から推定する以外には、最近の遺跡発掘の急増に伴って木製の琴の出土が認められ、重要な資料を提供している。

現在、最も漸る例は、静岡県登呂遺跡、福岡県辻田遺跡出土の弥生時代後期の木製琴とされるが、すでに琴としては完成された姿を示しており、初源がそれ以前に漸る可能性を示唆している。登呂遺跡出土のものは、長さ41cmを測る小形のもので、板材一枚で作られた簡素なつくりである。琴尾に6本の突起が作り出されており、6絃琴と考えられる。辻田遺跡からは4例出土しているが、完存するものは全長148.4cmを測り、登呂遺跡出土例に比べて、倍以上の大きさを示している。内、2例は一枚の板材で作られているが、他の2例は、それに共鳴槽を組み合わせたもので、すでに2種の形態が認められるのが注目される。いずれも、6絃琴と考えられる。古墳時代の木製琴は滋賀県服部遺跡等、資料は若干増えるが、やはり、一枚の板材で作られたものと、それに共鳴槽を組み合わせたものがあり、弥生時代後期のものとは法量、形態上の大きな差は認められない。絃数は一定せず、4絃・5絃・6絃のものが認められる。さらに、古墳時代には琴の実物そのものではないが、埴輪に表現された例として、重要文化財に指定されている群馬県前橋市朝倉出土の「腰かけて琴を弾く男子」の埴輪が有名である。顔面を彩色し、帯をしめ、おそらく祭りの席における琴を弾く姿を模したものと思われ、五絃の琴があざやかに表現されており、実物の限られる該期にとっては重要な資料である。しかし、これには琴柱の表現までは認められない。

実物では、遺存状態の良好な伝世品をもって比較せざるを得ないが、今日に伝えられている琴の最古の遺例は、唐の開元12年の紀年銘のある法隆寺獻納物の「黒漆七絃琴」であり、次いで正倉院北倉の七絃琴があり、これは開元23年(735)製とされている。また、奈良時代の例

として、実物ではないが、諸寺の縁起并流記資材帳にも、「雜琴」、「唐漆琴」など琴が記され、また、東大寺献物帳にある「銀平文琴」はあまりにも著明である。奈良時代にまで下降すると、このように実物の少數例に加え、文献記載例によって琴はかなり知ることができるが、琴柱そのものについての記載はあまりなく、それでも「西大寺資材流記帳」には「大唐樂器一具」の内に「琴柱十三枚」とあり、錦袋に13枚の琴柱が入って、1セットとなっていたことが判明する。これは、唐代の完成した「七絃十三絃」の姿に全く一致する。

しかしながら出土遺物や伝世資料・文献による古代琴の実相については、資料的にも限られたものであり、なかでも今回報告している6世紀後半については、水野氏は前代と隔絶する大きな展開を見せる時期であるとされ、それには大陸や半島の影響が考えられると思われる。ちょうどこの頃、その一方では須恵器窯で陶製の琴柱が、しかも、窯の体部片を転用しただけの琴柱が製作されたのである。つまり、対外的な交流はともかくとして、当時、琴はかなり広い需要層をもっていたことをこの資料は物語っている。この須恵器窯跡から出土した一片の陶製の琴柱は、広く流布していた当時の琴を知るうえでの重要な資料であることにはかわりがない。

もう一つ重要な遺物として、灰原出土の土師質手捏ね土器があげられる。これは既述したように、第2区黒色灰層出土のもので、その出土状態をもう少し詳細に述べれば、黒色灰層の北東端近くに、赤色焼土層をやや広い範囲でブロック状に含む個所があり、手捏ね土器は、この赤色焼土から比較的まとまって出土した。しかし、各個体は、作為的に定置された状態ではなく、このことから、窯出した時に、焼成部付近に存在した赤色焼土塊とともに、窯外へ撒き出され、灰原に投棄されたものと推測される。

これらの手捏ね土器は総数で12点出土しているが、他の微細片をも含めると、もう少しの個体が灰原中に散在していた可能性がある。しかし、これらは大量に生産されていたうちの不良製品としての一部なのか、あるいは、このような少數個体のみが例外的に生産されたものか、いずれとも推し難い。

また、その焼成方法を推測するにしても、須恵器の燃焼部や焚口付近の低火度酸化焰焼成の可能な部分で、意図的に酸化焰焼成されたものか、あるいは須恵器窯とは別途に、小型開放窯で焼成されたのかとも考えられるし、この点については明確な判断は下せないようである。さらに、灰原の検出地点付近で、このような手捏ね土器を用いた特殊な祭祀行為があったとの考え方もあるが、窯場におけるこのような行為については、管見では遺例を知らない。これら手捏ね土器の各個体の色調・焼成度合・胎土などが等質であり、一括して生産されたものであり、かつ胎土が本窯出土の焼成不良の須恵器と等質であることから、本窯の窯場において生産されたことは間違いない。以下においては須恵器窯跡で焼かれた「土師質手捏ね土器」について論を進めてみる。

今回の手捏ね土器出土に関しては、次の2点において問題点が指摘される。先ず、須恵器窯で焼成される須恵器以外の製品のもつ意味である。そして、もう一つは土師質手捏ね土器という特殊祭祀関連遺物を須恵器窯で焼成したという事実である。須恵器窯場において土師器を検

出した例はそれほど稀有な例ではなく、至近なものとして吹田29号須恵器窯跡の北北東150mの萩原ヶ池畔に位置する吹田2号須恵器窯跡、及びその対岸に位置する吹田1号須恵器窯跡の調査において、灰原からの出土例が、また、吹田40号須恵器窯跡では、灰原斜面に竪穴状建物跡があり、そこに焼成した土師器壺が検出された。前二者については、報告文による限り、その数量からみて須恵器窯で土師器が焼成されていた可能性が考えられるが、後者の場合は明らかに窯場（建物内）における土師器の使用例と考えられる良好な資料である。

土師器以外の須恵器窯での特殊製品については、陶棺がその代表的なもので、この点については豊中市における実態から、既に戦前から指摘はなされていた。市内における窯跡でも既に数基の例が報告されているが、それ以外の陶棺墓（古墳）出土の陶棺においても、土師質陶棺にあって、同心円叩き目の使用例があり、これらの陶棺は明らかに須恵器窯で焼成されたことを物語っている。問題とすべき点は、製作技法、あるいは焼成技術上の問題ではなくて、須恵質陶棺の生産された時期でありながら、須恵器窯において、一部についでは土師質に焼き上げることであり、喪葬に関わる保守性をこのような資料からも垣間見ることができる。

陶棺以外では、6世紀の須恵器窯においては、蛤塗、土鍤を代表とする漁具の生産も重要な視点を与えてくれる。千里丘陵における出土例は間かないが、大阪南部においては、大阪湾岸における集落を供給対象とした土鍤・飯蛸塗形土器が多量に生産されており、漁具をはじめとする生産用具にまで生産の幅を広げていったことがわかる。このうち飯蛸塗形土器については、森 浩一氏の詳細な論考がある。氏は和泉地方の湾岸遺跡において多量に発見される飯蛸塗形土器について、弥生～歴史時代に及ぶまでの型式分類を行ったうえに、特に古墳時代においては須恵器窯跡においても生産されていることに注視した。この中で、飯蛸塗形土器が生産されるのは、須恵器生産の当初からではなくて、少し遅れる時期、即ち6世紀に至ってからであり、この時期はまさに須恵器生産上で変動の時期でないかとして、この漁具生産の変動のなかに須恵器生産の本質的な問題に波及しようとしたのである。

以上述べてきたように、須恵器窯において生産された、このような特殊製品については多様な評価ができるのであるが、今回の成果により、土師質手捏ね土器を新たに加えることができたわけである。手捏ねミニチュア土器については、祭祀土器として祭祀遺跡から多量に検出される例に止まらず、通有の古墳時代集落址からも多量に検出される場合も散見され、祭祀場に限らず、集落内における祭祀行為の中で占める役割は大である。少なくとも石製模造品が古墳時代の一時期にのみ流布するに比べ、手捏ね土器はその時期的な幅も広いのは明らかである。また、福岡県大野城市裏田遺跡においても多量のミニチュア手捏ね土器が出土しているが、この遺跡は近隣に須恵器窯跡をひかえ、須恵器生産者の集落であろうといわれ、須恵器生産者と手捏ね土器が結びつく稀有な例であるが、手捏ね土器がその須恵器窯場で製作されたかどうかは判然としない点においては、本件の評価については從来の所見どおり、集落内における手捏ね土器の一出土例に止まってしまうかもしれない。

ここでやはり重要な問題は、この手捏ね土器を使用する祭祀がどのようなものであったかと

いう、祭祀の内容にかかる問題であろう。少なくとも夷辨祭祀の中に、この手捏ね土器が参画した形跡はほとんどなく、その点について、奥津城へ大量に搬入される須恵器そのものとは性格を異にする。また集落内出土の手捏ね土器といつても、祭祀場そのものを原位置で検出できない限り、その内容については推測するにすぎない。ここで、手捏ね土器を使った祭祀はどのようなものかについて言及しようとすれば、まさに手捏ね土器を使った祭祀を描写した記載が、日本書紀神武即位前紀にみられることに注目せねばならないだろう。すなわち、神武天皇は大倭の平定にあたって、敵の手中にある香山の埴土を取らせ、それを使って「八十平塚」、「天手扶八十枚」ほかをつくり、それを使って天神地祇を祭る話である。「手扶の土器」とは、いうまでもなく手でくじった土器のことと、手捏ね土器をさすのは明らかである。そして、その祭事の内容は、飴を齧ることで占いをたてることであり、あきらかに農耕祭祀である。また、統いて記述されている川上に巖戻を沈める祭祀は、水系を祭り、掌握することを物語っており、これも農耕祭祀である。このようにして考えると、農耕祭祀の中で重要な役割をはたしてきたのが土師質手捏ねミニチュア土器と考えることも可能である。ここに、手捏ね土器の用法の一端を把握することができ、また古墳から発見されないという考古学上の所見をも追認できるのである。

さて、森 浩一氏は先に述べた須恵質飯蛸垂形土器の生産が、6世紀にならないと成立しないことに注目し、該期を須恵器生産の変動期として捉えた。さらに論を一步進めて、漁具生産の実態を中央政権による独占的な生産体制の次第に崩壊する時期以降の所産と評価し、それ以後、中央政権の独占的な支配を離れた和泉地方の須恵器生産は、国衙による生産と分配に拘束されつつも、私的生産に移行していったと論じた。

今回の手捏ね土器出土の問題は、森氏の論じたような須恵器生産体制の変質の一現象として、そして、私的生産へ移行しつつある一現象として、たしかに理解することができよう。

しかし、漁具（等生産用具）の場合と、祭祀用具とは同列視できない側面を持っているのも事実であろう。すなわち、生産用具については耐久性からみても、土師質から須恵質への変遷は、必然的な側面を持っている。しかし、手捏ね土器は、その土器のもつ特殊性からみて耐久性などは度外視すべき問題でなければならない。すなわち、土器の法量・規模・耐久性・量産性など、通常の土器のもつあらゆる面、また同時に、須恵器のもつ、ほとんどあらゆる利点を否定するところに、祭祀用土器としての価値が存在する。この対称的なレベルに位置づけられたはずの手捏ね土器と須恵器との差異を、一括りにしてしまったのが、今回の調査成果である。そして、土師質手捏ね土器を須恵器の窯場において生産するようになった経過においては、先述したような特殊製品の生産をもあわせて行ってきた延長線上にあり、その意味するところは、たしかに私的生産化の拡大という生産体制の問題であろうが、手捏ね土器が祭祀用器であるという特殊性をも考慮すれば、そこに精神的な変質をも加味せねばならず、それは、森氏が飯蛸垂の生産について述べた生産体制の変質の度合に倣するものであろうと考えるわけである。

わずか10点余の土師質手捏ね土器の出土は、量的にも仔細であり、しかも、他にほとんど類例を認めることができないほど稀なことでもあるが、以上で述べた諸点からみても、6世紀後半期の須恵器生産体制の変化、あるいは祭祀そのものの重大な変化を示唆しているのではないだろうか。

### 〔註〕

#### 第 2 章

- (1) 秋枝 芳「吹田市吉志部遺跡採集の石器について」『吹田の歴史』第2号 1974年
- (2) 吹田市教育委員会『昭和55年度埋蔵文化財緊急発掘調査概報』1981年
- (3) 吹田市教育委員会『昭和56年度埋蔵文化財緊急発掘調査概報』1982年
- (4) 綱干善教編『吹田市史第8巻(考古篇)』吹田市史編さん委員会 1981年
- (5) 吹田市史編さん委員会・関西大学考古学研究室『吉志部古墳調査概報』1972年
- (6) 藤沢一夫・堀江門也『岸部瓦窯跡発掘調査概報』大阪府教育委員会 1968年

#### 第 3 章

- (1) 綱干善教編『吹田市史第8巻(考古篇)』吹田市史編さん委員会 1981年
- (2) 桜井義彰「堺津国桜井谷古代窯址に就いて」『考古学雑誌』第7巻3号 1916年  
笠井新也「堺津国桜井谷に於ける古代製陶所の遺跡及びその遺物について」『考古学雑誌』第5巻11号  
第6巻1号 1915年
- (3) 藤沢一夫「古代の轟中」『轟中市史』第1巻 1961年
- (4) 大阪府立吹田高等学校『大阪府岸部町迦葉ガ池窯跡調査報告』1955年
- (5) 綱干善教編『吹田市史第8巻(考古篇)』吹田市史編さん委員会 1981年
- (6) 大阪府立茨木高等学校歴史研究部『吹田須恵器窯跡群29号窯跡発掘調査概報』1967年
- (7) 大阪府教育委員会『陶邑』大阪府文化財調査報告第30輯 1978年
- (8) 鍋島敏也・藤原 学『千里古窯跡群』1974年
- (9) 吹田市史編さん室・関西大学考古学研究室『吹田2号須恵器窯跡発掘調査報告』1973年
- (10) 藤沢一夫・堀江門也『岸部瓦窯跡発掘調査概報』大阪府教育委員会 1968年
- (11) 吹田市史編さん委員会『吹田市史第8巻(考古篇)』1981年  
藤原 学「後期難波宮の葺瓦を焼成した、大阪府吹田市七尾瓦窯跡の発掘調査」日本考古学協会第46回  
総会研究発表要旨 1980年

#### 第 4 章

- (1) 吹田市教育委員会『昭和55年度埋蔵文化財緊急発掘調査概報』1981年
- (2) 吹田市史編さん室・関西大学考古学研究室『重水遺跡第1次発掘調査概報』1975年  
吹田市教育委員会・関西大学考古学研究室『重水遺跡第2次発掘調査概報』1975年
- (3) 吹田市教育委員会・吹田市下水道部『藏人遺跡』1979年

## 第 5 章

- (1) 関西大学考古学研究室・吹田市教育委員会『吉志部古墳調査概報』1972年
- (2) 須恵器は7世紀初頭のもの。鉄器については詳細不明である。
- (3) 天坊幸彦『上代浪車の歴史地理学的研究』1947年
- (4) 桑千善教編『吹田市史第8巻』(考古篇)吹田市史編さん委員会 1981年  
吹田市教育委員会『昭和55年度埋蔵文化財緊急発掘調査概報』1981年  
吹田市教育委員会『昭和56年度埋蔵文化財緊急発掘調査概報』1982年
- (5) 銚子敏也・藤原 学『千里古窯跡群』1974年
- (6) 桑千善教編『吹田市史第8巻(考古篇)』吹田市史編さん委員会 1981年  
藤原 学「後期難波宮の葺瓦を焼成した、大阪府吹田市七尾瓦窯跡の発掘調査」『日本考古学協会第46回総会研究発表要旨』1980年
- (7) 藤沢一夫・堀江門也『岸部瓦窯跡発掘調査概報』大阪府教育委員会 1968年
- (8) 桑千善教編『吹田市史第8巻(考古篇)』吹田市史編さん委員会 1981年  
1981年6月に内本町2丁目で実施した調査において、弥生時代中期(巣内第I様式)の遺物及び縄文時代～近世・近代・の遺構、遺物が検出された。
- (9) 桑千善教編『吹田市史第8巻(考古篇)』吹田市史編さん委員会 1981年
- (10) 銚子敏也・藤原 学「大阪府吉志部遺跡の遺物」『古代学研究』第54号 1969年
- (11) 須恵器横窓が出土しているが、詳細は不明である。
- (12) 村川行弘 他『攝津市史第1巻』攝津市史編さん委員会 1977年
- (13) 東奈良遺跡調査会『東奈良』1979年
- (14) 大阪府教育委員会『蹴山古墳群発掘調査概要』1973年  
森 浩一 他『大阪府史第1巻(古代篇1)』大阪府史編集専門委員会編 1978年
- (15) 北野耕平『河内野中古墳の研究』(大阪大学文学部国史研究室研究報告第2冊)1976年
- (16) 森田克行『鶴本山A-3号墳の調査』『大阪府下埋蔵文化財担当者研究会(第7回)資料』1982年
- (17) 大阪府立茨木高等学校歴史研究部『吹田須恵器窯跡群29号須恵器窯跡発掘調査概報』1967年
- (18) 大橋信弥 他『服部遺跡発掘調査概報』滋賀県教育委員会・守山市教育委員会 1979年
- (19) 田辺昭三 他『湖西線関係遺跡発掘調査報告書』湖西線関係遺跡発掘調査団 1973年
- (20) 岡崎 敬 他『宗像・沖ノ島』宗像沖ノ島遺跡調査団 1979年
- (21) 水野正好「琴の誕生とその展開」『考古学雑誌』第66巻1号 1980年
- (22) 佐田 茂「古代琴雅考」『考古学雑誌』第66巻1号 1980年
- (23) 日本考古学協会『壹呂・本編』1954年
- (24) 井上裕弘 他「春日市大字上白水所在辻田遺跡の調査」『山陽新幹線埋蔵文化財調査報告・第12集』福岡県教育委員会 1979年
- (25) 三木文雄『埴輪』『日本の美術』No.19 1967年
- (26) 土井 弘『正倉院』『日本の美術 6』1974年
- (27) 「大安寺伽藍縁起并流記資財帳」『寧來道文中卷』竹内理三編 1962年
- (28) 「西大寺資財流記帳」『寧來道文中卷』竹内理三編 1962年
- (29) 「東大寺献物帳」『寧來道文中卷』竹内理三編 1962年
- (30) 村川行弘 他『大阪府吹田市岸部駅跡池窯跡発掘調査報告書』大阪府立吹田高校 1955年
- (31) 桑千善教編『吹田市史第8巻』(考古編)吹田市史編さん委員会 1981年
- (32) 桜井義彰『根岸松谷古代窯址について』『考古学雑誌』第7巻3号 1916年
- (33) 森 浩一「飯綱盛形土器と須恵器生産の問題」『近畿考古学論叢』1962年

図版一 吉志部2・3号填景観



北からの景観



南からの景観



南からの景観



2号墳推定地点（東から）

圖版三 吉志部2·3號墳  
遺物出土地點



2號墳推定地點近景

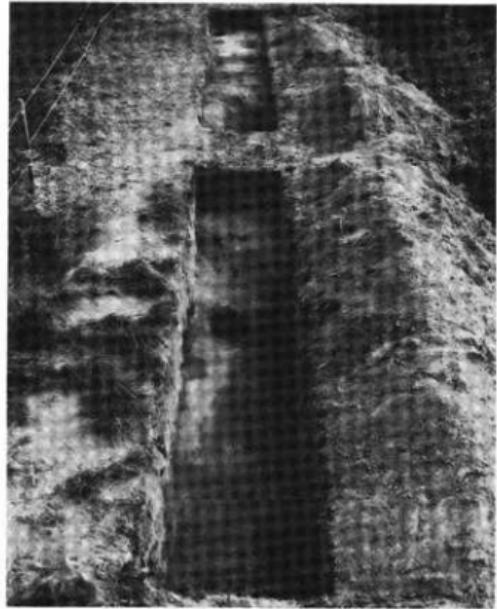


3號墳推定地點近景

図版四 吉志部2・3号墳 尾根上試掘トレンチ

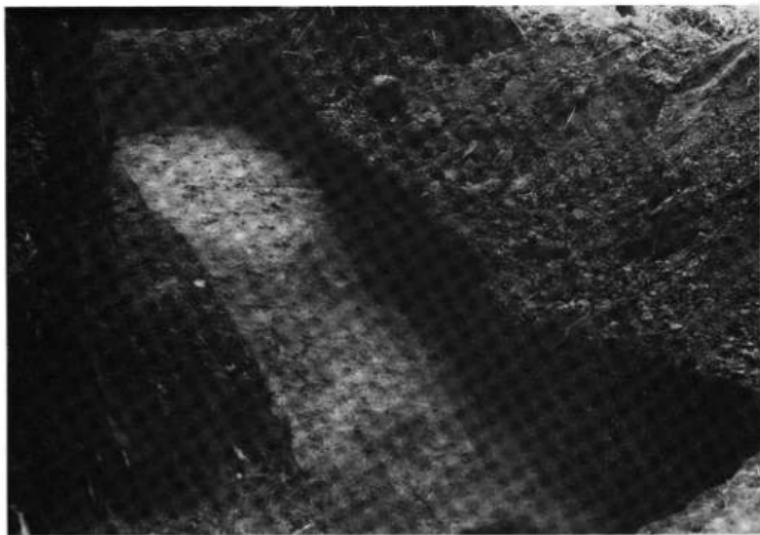


T-1・T-2・T-3・T-4 (西から)



T-5・T-6 (東から)

図版五 吉志部2・3号墳 試掘トレンチT8・T9

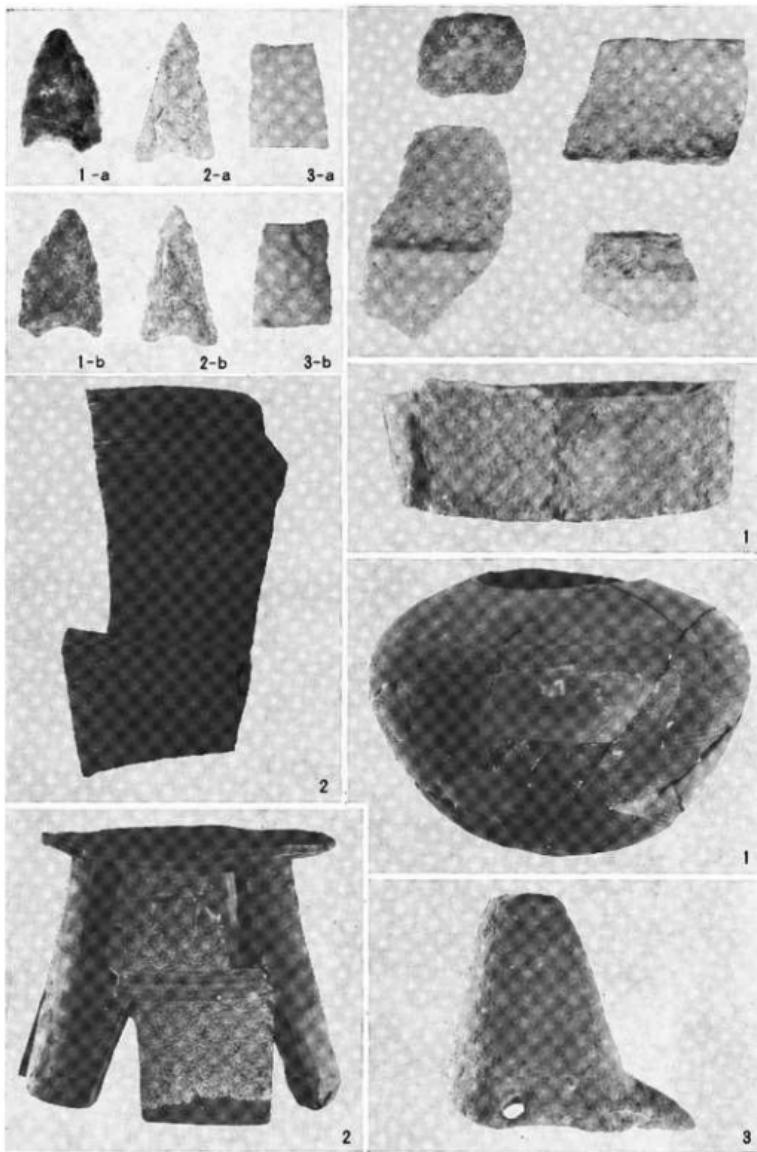


T-8 (南から)



T-9 (東から)

図版六 吉志部2・3号墳採集遺物



図版七 吹田 29号須恵器窯跡 景観



南からの景観



調査前の近景（西から）

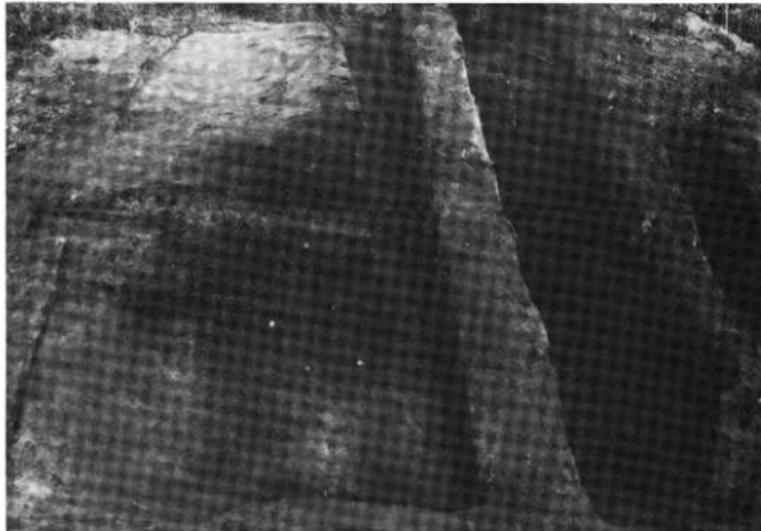
図版八  
吹田  
29  
号須  
恵器  
窯跡  
試掘トレンチ



T-1・T-2 (西から)

T-3 (北から)





G1 (西から)

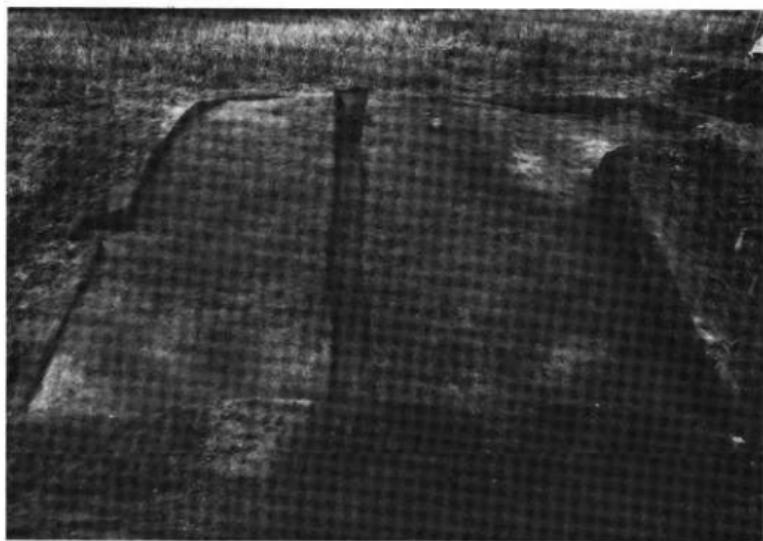


灰原土塗断面（北から）

図版一〇 次田29号須恵器窯跡 G1・G2

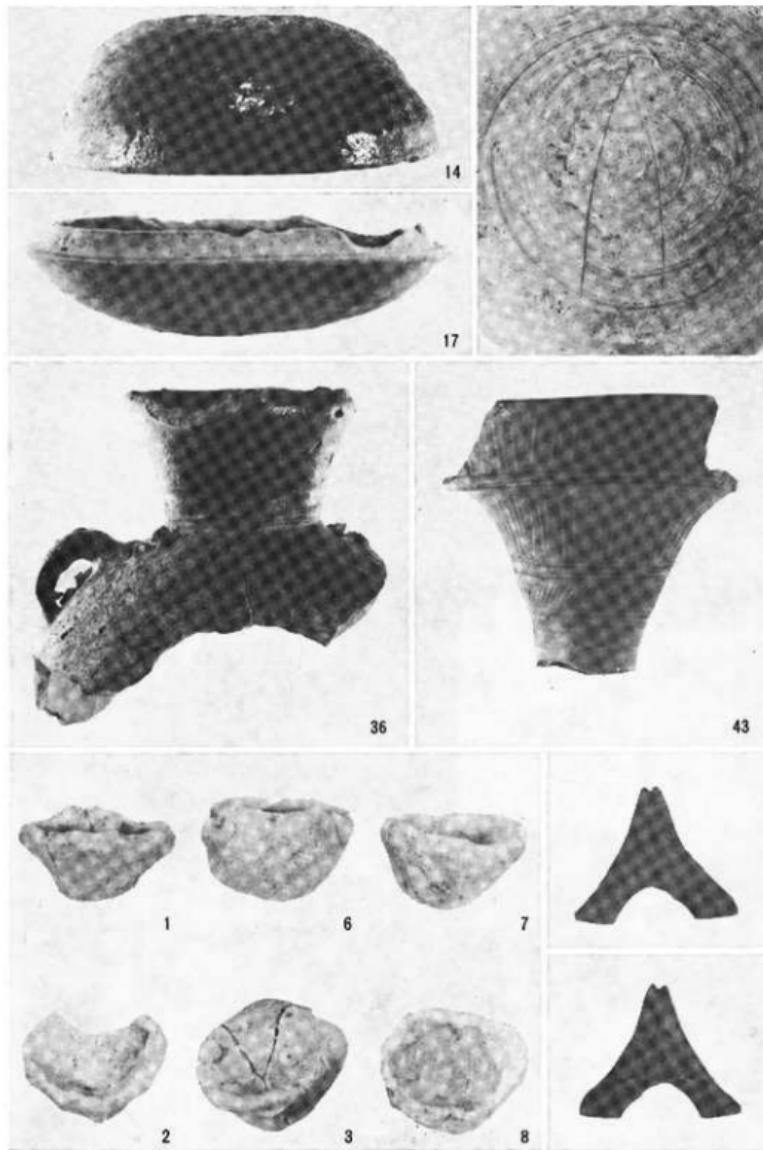


灰原土層断面（北から）



調査完了後（南から）

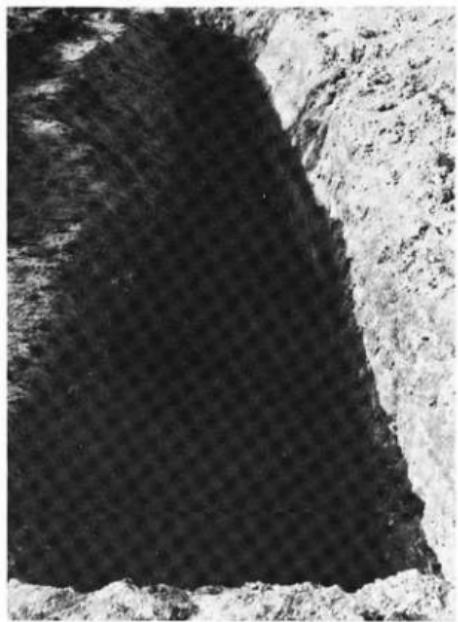
圖版二一 吹田29号須恵器窯跡出土遺物



図版一二 重水南遺跡  
近景・試掘トレンチ



調査前近景（北から）



試掘トレンチ（南から）

〔昭和57年度〕

埋蔵文化財緊急発掘調査概報

吉志部2・3号墳  
吹田29号須恵器窯跡  
墨水南遺跡

昭和58年3月31日

編集 吹田市泉町1丁目3番40号  
発行 吹田市教育委員会